

キャンパスで 雑談・屋台カフェをやってみた

甲南大学総合研究所
「社会的処方研究プロジェクト」報告書
2023-2024



目次

はじめに	3
写真で振り返る「雑談・屋台カフェ」	6
「雑談・屋台カフェ」2年間の記録	12
「雑談・屋台カフェ」の1日	14
「雑談・屋台カフェ」接客マニュアル	16
観察先一覧	17
研究会記録「社会的処方について学ばせてください」	
Vol. 1 地域をケアする屋台とシェア型図書館 守本陽一さんの場合	18
Vol. 2 高校生を応援する居場所づくり 稲本朱珠さんの場合	21
Vol. 3 心理職の立場で社会的処方を行うこと 福島沙紀さんの場合	23
Vol. 4 アートプロジェクトが作る地域のつながり 雨森信さんの場合	24
Vol. 5 キャンパスでの社会的処方の続け方 鈴木健一さん、船津静代さんの場合	27
Vol. 6 美術館と地域のつながり 大政愛さんの場合	30
公開研究会「美術家・山村幸則、自作を語る：私が町に表現を運ぶ理由」	32
活動をふりかえって：担当者小論	
社会的処方における居場所とは？ 阿部真大	40
臨床心理学の教員が、「雑談・屋台カフェ」をやってみた—実践してみての雑感 大澤香織	42
学生相談からキャンパスの社会的処方をまなざす 高石恭子	44
アートからみた「雑談・屋台カフェ」 服部正	46
参加者の声	48
主要参考文献リスト	52

はじめに

本書は、甲南大学総合研究所の研究奨励助成を受けて2023年度と2024年度に実施した「社会的処方研究プロジェクト」の報告書です。近年、医療や介護、福祉の分野を中心に「社会的処方 (social prescribing)」という考え方に対する注目が集まっています。「社会的処方」とは、投薬などの従来の医療的処置ではなく、孤立などの社会的な問題を抱える患者・相談者に対して、身近な地域にある様々なリソースを活用して社会とのつながりを作り、それによって当事者の心身の健康状態を改善しようとする取り組みです。

主に単身高齢者などを対象とする文脈で語られることの多いこの社会的処方を、大学教育の現場に応用することの可能性について考察するために、このプロジェクトは発足しました。各地で取り組まれている社会的処方の実践事例を見ると、アートとの親和性が高いものが多いことに気づかれます。2023年から東京藝術大学を中心に「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」形成事業が推進されていますが、そこでは「文化的処方」というキーワードが盛んに用いられています。

このプロジェクトも、医療や福祉分野における社会的処方と芸術実践の連続性に注目したことが出発点でした。そのため、芸術学を専門とする教員と、臨床心理学を専門とする教員、そして社会学の分野で居場所作りや過疎地域の問題を専門とする教員でチームを組んで、プロジェクトを発足させました。研究チームでは、社会的処方の先進事例を学ぶための現地視察、有識者を招いての研究会、そして大学内での実践的活動を通じた効果の検証という三つの柱を立てて活動を進めてきました。

現地視察では、社会的処方の具体例として取り上げられる活動拠点や、地域社会でのつながりの創造のリソースとなっている施設、あるいはその潜在的な可能性を持つと思われる施設・活動などを、チーム構成員の専門性と関心に応じて選択しつつ訪問調査を行いました。そして、各地での調査による知見に基づき、詳しく話を聞いて私たちの学びを深めたいと思う方々に依頼して、オンラインでの研究会の講師を務めていただきました。お招きした講師は、医療福祉や地域創造の専門家から、キュレーターや芸術家まで多岐にわたりました。

そしてそれらの視察と研究会での学びを活かしながら、学内に屋台のカフェを出すための準備を進めました。その際にヒントになったのは、研究会の講師も務めていたいた兵庫県但馬地域の医師、守本陽一さんの「モバイル屋台 de 健康カフェ」という取り組みでした。守本さんの活動については18ページからの研究会の報告でも触れていますが、町中に屋台を出して物々交換でコーヒーを提供し、そこで生まれる会話から健康相談や地域資源の発見につなげていくという、それ自体がつながりの場としての社会的処方の実践例であると同時に、地域での社会的処方の実践を促すための装置としても機能するものです。

私たちも守本さんが使用している屋台と同じ形式の屋台を準備し、それを「雑談・屋台カフェ」と名付けました。私たちは医師ではないので健康相談はできませんが、大学のキャンパス内で実践するには健康相談よりも「雑談」にフォーカスすることが有効であると考えました。大学での屋台カフェで出会うのは、高齢者ではなく若い世代の学生が中心です。学生たちにとっては、健康状態よりは友人関係や学業や将来の目

標などのほうが関心事となることが多いと予想されました。そのような話題について、あまり深刻にならずに立ち話で気軽に話し合える場になれば、それはキャンパス内の社会的処方のリソースのひとつになれるだろうと考えました。こうして、屋台のスタッフや周辺にいる参加者との5分間の「雑談」と引き換えに無料でコーヒーを提供するというルールが設定されました。守本さんの取り組み以外にも屋台でコーヒーを提供する取り組みは各地で行われていますが、「雑談5分をコーヒーと交換する」という仕組みを明確化したところに、私たちの取り組みの独自性があります。研究の枠組みで行ってきたため、無償でコーヒーをできたことも、多くの人を呼び寄せるうえで有効でした。

こうして、2023年12月に初めての「雑談・屋台カフェ」をキャンパス内で実践しました。私たちはこの時、この活動には意義があり大きな可能性を秘めているということを直感的に理解しました。それ以降、大学の長期休暇期間を除いて、毎月1回程度のペースでカフェ活動を続けてきました。

大学という組織は縦割りの構造に陥りやすいものです。文学部、経済学部というような学部ごとの枠組みもあれば、教務部、財務部、国際交流センターなどという役割ごとの枠組みもあります。属性についても教員、職員、学生、院生などに分かれ、それが部局ごとに細分化されています。教職員については、専任・非常勤、正規・非正規という立場の違いもあります。その小さな区画のなかで多くのことが完結してしまって、枠組みを横断する仕組みは十分ではありません。文学部の教員が経済学部の学生と話す機会や、財務部の職員が文学部の学生と出会う機会は、狭いキャンパス内にもかかわらずほとんどないのです。「コスパ」「タイパ」という言葉が盛んに用いられるように、業務や経営の効率化が正義とされる風潮が強まるなかで、この縦割りの傾向はますます強化され、そこには「雑談」が入り込む余地はほとんどありません。「雑談・屋台カフェ」はこの硬直した状況に一石を投じるものになる。私たちはそう確信したのです。

活動を続ける中で、私たちは多くの方々と出会い「雑談」を繰り返してきました。様々な学部の学生、常勤・非常勤の教員、正規・非正規の職員だけでなく、出入りの業者さんや一般の来校者の方ともお話しする機会がありました。その中には、留学のために休学しようかどうか迷っているところだと教えてくれた学生もいました。ゼミに所属していないので教員と授業とは関係のない話をすること自体が初めてだという学生もいました。職員や業者さんが就職活動を間近に控えた学生の相談相手になってくれる場面も多くみられました。事務職員の方が以前は銀行で働いておられたこと、卒業アルバムの製作を請け負っている業者さんがいくつかの転職の後で今の仕事に就いておられることなど、社会人との何気ない対話が学生にとっては新鮮な学びとなる場面が多くありました。勉学や学生生活にちょっとした不自由を感じている学生に、スタッフの教員が相談先を提案するという場面も何度かありました。地方から来た新入生が単位の取り方や友達の作り方について、先輩の学生からアドバイスをもらっていたり、理系の学生と文系の学生が共通する趣味を見つけて盛り上がり上がっていたりと、この「雑談・屋台カフェ」がなければ起らなかった出会いがいくつもありました。

この活動には私たちの予想を上回る大きな反響がありました。ポートアイランドにあるフロンティアサイエンス学部から声をかけていただき、トラックで屋台を運んで出張「雑談・屋台カフェ」を開催したことや、国際交流センターと協力して留学生が集うグローバルゾーンで実施したこともあります。もっと頻繁に開催してほしいという声をい

ただくことも少なくありませんでした。アーティストから依頼をいただき、神戸市内の展覧会会場で出張カフェを開かせていただいたこともあります。

学外から視察に来てくださった方もありました。私たちが視察で訪れた「夕方さんぽ」を主催している名古屋大学の学生支援本部からは、多くのスタッフの方々が早い段階で視察に来てくださいました。名古屋大学とはその後も交流を続けて、研究会にも講師として参加していただきましたし、2025年5月には名古屋大学で開催される「日本学生相談学会」の大会でのプログラムの一環として、「雑談・屋台カフェ」を実演させていただくことにもなっています。屋台の機能や構造などについて研究している他大学の建築学科の大学院生が調査のために訪問してくれたこともあります。研究対象という面では、卒業研究で居場所作りについて研究している学生が、指導教員の紹介でスタッフとして活動を手伝ってくれるようになりました。この活動に関心をもって学外から何度も通ってくださった一般の方もおられます。

このようなひとつひとつの出来事は決して大きなことではないかもしれません、それらが積み重なることで「雑談・屋台カフェ」が大学内で定着してきたということを実感しています。活動日や活動場所はインスタグラムで告知していますが、それを見て何度も訪問してくれるリピーターの学生や職員も増えてきました。この活動を気にかけて、新たな学内での活動の場を提案してくださる管理職の方もおられます。このプロジェクトを総合研究所に申請した時点では、視察や研究会はともかくとして、学内に屋台を出すことが本当に研究といえるのかという懐疑的な声も聞かれました。キャンパス内に「雑談」のための屋台が不定期に出現するという状況を、具体的に思い浮かべることが難しかったのだと思われます。しかし、この2年間の実践を通じて多くの方がそのことの意味を理解してくれました。「雑談」ができる場所を組織内にインストールすることによる効果や、大学という場所が構造的に持っている弱点などに対する多くの発見は、この実践活動があればこそもたらされたものです。

2年間の研究期間を経て、設備も制度もほぼ整えることができました。あとはコーヒー豆と紙コップさえあれば「雑談・屋台カフェ」は継続可能です。これからもぜひ続けていきたい。私たちはそれが重要だと考えています。この活動をヒントに、大学内のあちらこちらに様々な居場所が増えていけば理想的です。そのような活動を展開する人が増えるということは、それだけ大学組織のメンテナンスへと目を向ける人が増えることを意味します。当たり前だと思っていた大学での過ごし方について、ちょっと立ち止まって考えてみる。そのための場として、今後も「雑談・屋台カフェ」を機能させていきたいと思います。

2025年3月
研究チーム代表 服部正



P.6-11, 13 *の写真は、撮影：川本まい



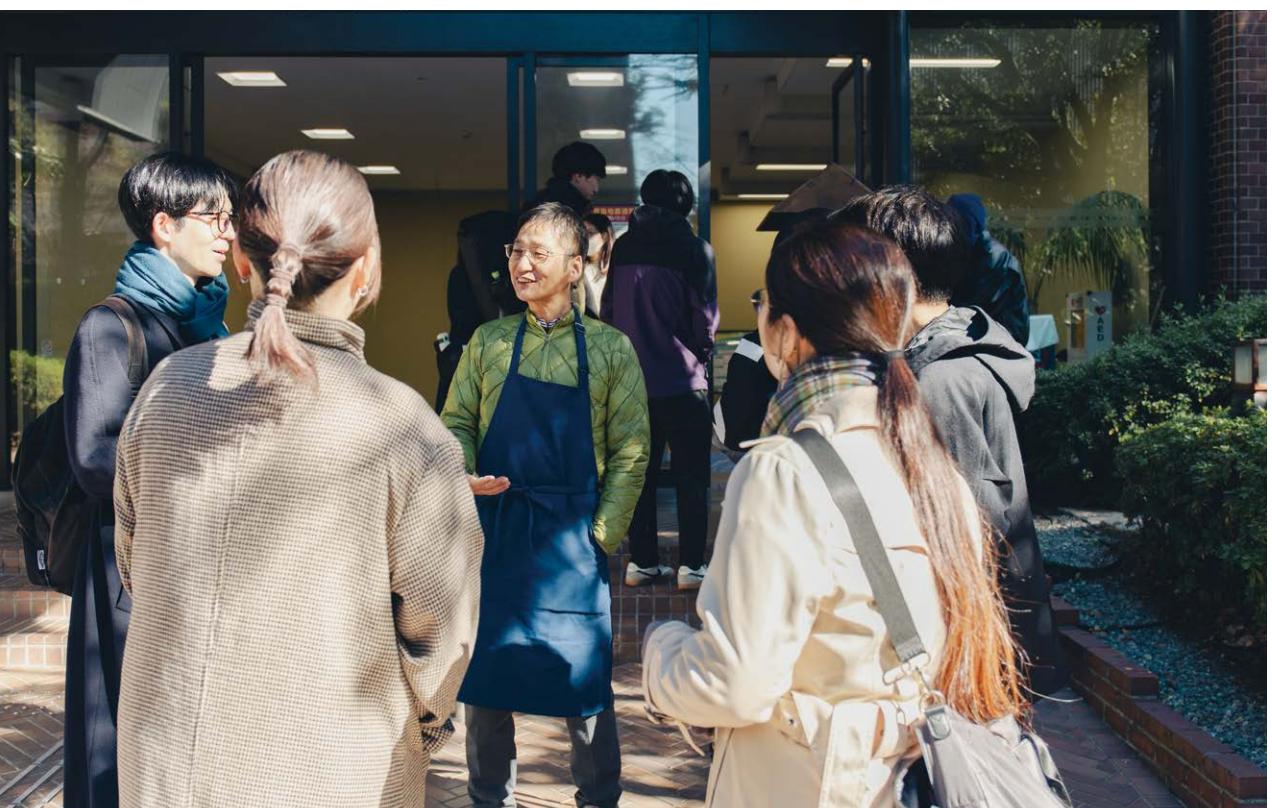
*



*



*



*



*



*



*



*

「雑談・屋台カフェ」2年間の記録

第1回



2023年12月8日〔金〕12:00-14:30

甲南大学岡本キャンパス芝生広場

初めて「雑談・屋台カフェ」は事前予告もなく実施。初めてということもあり、見学を兼ねた教員・職員が数多く参加。

第2回

2024年2月23日〔金〕16:00-17:00

甲南大学岡本キャンパス10号館10-12教室

公開研究会の後の参加者の意見交換の場として臨時開催。

第3回



2024年1月15日〔月〕10:30-13:30

甲南大学岡本キャンパス10号館1階エントランスロビー
寒さが厳しく室内で実施。この時から専用インスタグラムで事前に予告して開催するようになる。

第4回

2024年4月9日〔火〕15:00-16:30

甲南大学岡本キャンパス6号館6-33教室

スタッフ研修も兼ねて文学部人間科学科服部ゼミの授業内でワークショップとして出張開催。

第5回



2024年4月16日〔火〕11:00-13:30

甲南大学岡本キャンパス芝生広場

新学年最初の実施。スタッフも代替わりして新しいメンバーも参加。

第6回



2024年5月9日〔木〕13:30-14:30

甲南大学岡本キャンパス2号館2-41教室

スタッフ研修も兼ねて文学部人間科学科大澤ゼミの授業内でワークショップとして出張開催。

第7回



2024年5月14日〔火〕11:00-13:30

甲南大学岡本キャンパス芝生広場

快晴の空の下、帰国直前の交換留学生が数多く参加。

第8回



2024年6月13日〔木〕11:00-14:00

甲南大学岡本キャンパス6号館南側スペース

iCommons（食堂、生協など）との連絡通路になる場所で人通りが多く、50杯を超える飲み物を提供。

第9回



2024年6月27日〔木〕14:00-16:00

甲南大学ポートアイランドキャンパス1階エントランスホール

フロンティアサイエンス学部の校舎で出張開催。実験の合間に息抜きに訪れる大学院生も多数。近隣の企業の方の参加もあり、就活中の学生が体験談を聞くなど普段とは異なる交流が実現。

第
10
回



2024年7月5日 [金] 11:00-13:30

9号館と12号館の間のピロティスペース

強い日差しと暑さを避けられる風通しの良い場所として選定したが、山側から吹き抜ける風が予想外に強く、紙コップが風に飛ばされるなどトラブルが頻発。たまたま通りがかった全学共通教育センターの水澤先生がモルック場を臨時開設してくださり、いつもとはちがう楽しみ方も。

第
11
回



2024年7月16日 [火] 11:00-13:30

甲南大学岡本キャンパス10号館1階エントランスロビー
夏休み前最後のカフェは猛暑を避けて屋内で開催。

第
12
回



2024年9月22日 [日] 15:00-16:30

神戸市立海外移住と文化の交流センター内

KOBE STUDIO Y3

KOBE STUDIO Y3で開催中の「高野いくの個展「久しぶりに、よみかえした日記」」の関連イベントとして出張開催。美術展の来場者と美術の話題が中心の雑談。

第
13
回



2024年10月24日 [木] 11:15-13:30

甲南大学岡本キャンパス芝生広場

夏休み明け最初の開催。卒業アルバムの撮影会場が近かったこともあり、これまでとは違う人たちへの活動周知につながる。水澤先生のモルックが再登場。ゲームに興じる教員の姿をほほえましく見守る学生も。

第
14
回



2024年11月22日 [金] 11:15-13:30

甲南大学岡本キャンパス芝生広場

これまでで最も多い7人の学生がスタッフとして参加。フォトグラファーの川本まいさんによる記録撮影を実施。

第
15
回



2024年12月20日 [金] 11:15-13:30

甲南大学岡本キャンパス2号館1階グローバルゾーン
国際交流センターとの協力企画として実施。多くの留学生との交流が実現。

第
16
回



2025年1月16日 [木] 11:15-13:30

甲南大学岡本キャンパス10号館

今年度最後の実施。気温は低かったものの日差しが気持ちよかったので急きょ予定を変更して屋外で開催。フォトグラファーの川本まいさんが準備から後片付けまで密着して記録撮影。

05

「雑談・屋台カフェ」の1日

カフェ活動の1日の流れをご紹介します。
活動は11時頃から始めることが多く、
10時頃から準備に取りかかります。
13時半頃に「店じまい」、14時過ぎには
後片付けも完了します。

01

開催約1週間前： インスタグラムで開催予告

総合研究所と文学部事務室に事前連絡。文学部事務室から職員掲示板にも告知を掲載してもらう。



開始15分前：スタッフが研究室に集合

屋台は服部研究室で保管。研究室から運び出し、電動ドリルで屋台の腕を取り付け。廊下で備品のチェックと看板の手直しをして出発。屋台は、YADOKARI社製の組み立て式屋台を使用。(現在は生産中止のようです。)



04

開始1時間前：お湯の準備・豆の補充

1.5リットルの保温ポット4つ分の熱湯をあらかじめ準備する。水は浄水器でろ過した水道水とミネラルウォーターを併用。



前日まで： 消耗品の補充

コーヒー豆、紅茶、砂糖、コーヒーフレッシュ、紙コップ、マドラーに不足があれば購入しておく。

02

当日の朝： インスタグラムで開催場所の告知



03

06

開始5分前：現場到着

屋台のセッティング（看板設置、天板の取り付け、コーヒーサーバーやドリップポットの準備、ゴミ袋の準備、紅茶ポット洗浄用のウォーターサーバーの準備など）。机上の紙コップの数をあらかじめ数ておく。作業スペースの確保のため屋台の腕に載せられる天板を自作した。



開始：エプロンを着けて開店！

人はいなくてもまずは豆を曳いてコーヒーを淹れ始める。匂いにつられて最初の参加者がやってくる。慣れていないスタッフのために先輩がマニュアルを準備してくれた。



カフェ開催中

余裕がある時間帯は相手の顔を見てから豆を曳き始める。昼休みなど繁忙期の前はあらかじめ豆を曳いて準備しておく。

豆を曳きながら、ドリップしながらでも、相手に話しかける。参加者同士で会話が盛り上がっているようなら見守りながらコーヒーを淹れる。コーヒーが苦手な人のために紅茶、ハーブティー、カフェインレスのコーヒーも用意しておき、必要に応じて勧める。

お湯が減ってきたら手近な学内のコンセントを使って電気ケトルでお湯を補充。

10

終了後

インスタグラムで当日の様子を報告



カフェ終了：後片付け

紙コップの残数を数えて提供した飲み物の数を確認する。ゴミをまとめて、残ったお湯や水は洗面台に流す。地面の掃除もして研究室に撤収。

事務室のシンクを借りてコーヒーサーバーやドリッパーを洗浄。屋台の腕を取り外して研究室に収納して完了。



08



「雑談・屋台カフェ」接客マニュアル

スタッフとして参加してくれているのは、主に文学部人間科学科の服部ゼミと大澤ゼミの有志の学生ですが、それ以外にも、この活動に興味を持って参加してくれる学生もいます。服部ゼミと大澤ゼミでは、社会的処方について学び、自分でコーヒーを淹れてみる研修を事前に実施しています。そこで興味を持ってくれた学生の予定を聞きながら、開催日程を決定しています。

ここでは、初めてスタッフとして参加する学生のために準備した「接客マニュアル」を公開します。スタッフの中にも、雑談が得意な人もいれば苦手な人もいます。マニュアルでは、こんな感じで声をかけてみたらというヒントを示していますが、このマニュアルを見ながら対応すると自然な会話にならないので、カフェ開催中はマニュアルを見ないようにとお願いしています。

ここは雑談カフェです。コーヒーいかがですかと声をかけ、コーヒーは無料ですが、5分以上の雑談と引き換えです、と説明してください。コーヒー豆を曳きながら、コーヒーを淹れながら、コーヒーを飲んでもらいながら、雑談をしてください。

教員ならば

学部はどこですか？ 専門は何ですか？ いつから甲南で教えていますか？ 甲南の学生をどう思いますか？ どうして大学の先生になろうと思ったんですか？ 休みの日は何をしていますか？ など、聞いてみてください。

学生ならば

学部は？ 何年生？ 何を研究しているの？ 部活・サークルは？ アルバイトは？ ゼミの先生はどんな感じ？ 普段お昼はどうしてる？ など、色々と話題はあるはずです。

ひとつの質問につなげて、それってどんな感じ？ なんでその学部にしたの？ など、話題は広がるはず。

逆に、なんでこんなことやっているの？ と聞かれる可能性も高いと思います。

ゼミの先生と、課外活動としてやっていること、屋台のコーヒーをネタに知らない学生同士や学生と職員や教員が雑談することで、多様な考え方に出会ったり、気分転換になったりするような、そんな場所を学内に作れば良いなと考えていること、こういう活動は、「社会的処方」といって、孤立を防いで人と人のつながりのある居心地の良い社会を作る活動として、最近注目されていること、などを説明してください。

次はいつやるの、という質問もあると思います。

不定期で、月に1回くらいやろうと思っている。来月もやると思うけど日程は決まっていない。少し前に、インスタで告知します。屋台に掲示している2次元コードから見られるので、ぜひフォローしてください。

などと説明してください。

親しくなっても、初対面でラインアカウントの交換などはしないようにしてください。

もし、ちょっと心配な感じで、相談をもちかけられたら 大学生生活で困りごとがあるようだったら、iCommons 2階の学生生活支援センター（旧・学生部）を紹介する。 授業についての苦情などなら、教務部に相談することをすすめる。

手に負えないと思ったら近くの教員にヘルプを求める。その際、ちょっと分からないうちに先生に相談してもいい？と確認してから。

職員ならば

どこで働いているんですか？ どんな仕事をしているんですか？ 甲南で働き始めて何年目ですか？ なぜ甲南で働くと思ったんですか？ 職員の方からみて学生のことはどう思いますか？ 休みの日は何をしていますか？ など、話を広げてください。

訪問して学ばせていただきました | 観察先一覧

プロジェクトでは、社会的処方や居場所をテーマにメンバーが自分自身の関心に合わせて訪問先を決め、現地観察を行いました。複数のメンバーで一緒に訪問した場所もあれば、単独で訪問した場所もあります。

2023年

7月16日	横浜市寿町健康福祉交流センター 「新人Hソケリッサ」ダンスワークショップ参加
7月25日	福井県南越前町各所 新野保路医師の屋台を用いた「暮らしの相談」活動視察
7月29日-30日	東京都大田区 いづるば、埼玉県新座市中央公民館体育館 岩下徹氏即興ダンスワークショップ参加
9月11日	兵庫県豊岡市 だいかい文庫 守本陽一氏・加藤優一氏講演会参加
11月11日	東京都杉並区 小杉湯、小杉湯となり 店長・白井杏実氏ツアーレクチャー参加
12月22日、 2024年1月26日	名古屋大学学生支援本部、東山キャンパス内各所 「夕方さんぽ」体験とスタッフミーティング参加

2024年

2月24日	福島県白河市 コミュニティカフェEMANON 理事長・青砥和希氏インタビュー・意見交換
2月25日	福島県猪苗代町 はじまりの美術館 館長・岡部兼芳氏、学芸員・大政愛氏インタビュー、ワークショップ参加
3月1日	川崎市 暮らしの保健室 利用者としての参加型活動視察
3月3日	京都市京都経済センター 「社会的処方EXPO2024 in Kyoto」参加
3月17日	広島県豊田郡 ミカタカフェ 代表・勝瀬祐介氏インタビュー
8月10日	福島県猪苗代町 はじまりの美術館 トークシリーズ「てんでバラバラ」中田一会氏講演会参加
8月11日	福島市 いげたビル3階 空き地商店 展覧会「暮しと風」視察
11月29日	富山県砺波市 みやの森カフェ、シェアハウス Liberoとやま 活動視察、一般社団法人 Ponteとやま理事兼みやの森カフェ店長・加藤愛理子氏他インタビュー
12月27日	茨城県つくば市 筑波大学学生相談室、総合相談窓口 視察、杉江征氏、水野雅之氏、慶野遙香氏、北原祐理氏 インタビュー
12月28日	福島県猪苗代町 はじまりの美術館 第8回福島県障がい者芸術作品展「きになる△ひょうげん2024」視察

2025年

2月7日	静岡県浜松市 認定NPO法人クリエイティブサポートレツツ「ちまた公民館」、「たけし文化センター」 活動視察
2月21日	茨城県水戸市 水戸芸術館 視察、「造形実験室」ワークショップ参加
2月28日	京都こころまる 視察、別司ちさと氏インタビュー
3月9日	川崎市コンベンションホール 「社会的処方EXPO2025 in Kawasaki」参加
3月10日	福島県猪苗代町 はじまりの美術館、郡山市 あさかホスピタル 視察、学芸員・大政愛氏インタビュー

地域をケアする屋台と シェア型図書館

◎守本陽一さんの場合

2023年10月16日[日]18:30-20:30

研究会の1回目として、この雑談・屋台カフェの直接のヒントになった「モバイル屋台de健康カフェ」の取り組みを兵庫県但馬地方で行ってこられた総合診療医師の守本陽一さんをお招きして、屋台カフェのこと、シェア型図書館「だいかい文庫」のことなどについてお話を伺いました。（担当：服部正）



屋台カフェ開催中の守本さん（中央）

守本陽一（もりもと・よういち）：

1993年兵庫県出身。兵庫県但馬地域で総合診療医として働く傍ら、2020年11月に一般社団法人ケアと暮らしの編集社を設立。屋台カフェやシェア型図書館などを運営し、社会的処方を実践するなど、まちづくりとケアの橋渡し活動を行う。現在は、保健所で、医療政策および重層的支援体制整備事業、在宅医療介護連携事業や社会的処方モデル事業など、様々な市町村支援に従事している。

守本 学生時代に、地元のフィールドワークの延長で医療相談を企画したら、一人しか相談に来なかったということがありました。医療で人は呼べない、正しさを語っているだけでは人は呼べないんだ、ということに気づきました、屋台カフェという取り組みを始めました。このような活動のためには、いろんな人を巻き込まないといけないんですけど、巻き込む前に巻き込まれることが大事で、自分から地域のイベントに参加して、今度屋台作るので皆さん来てくださいというように関心の輪を広げていきました。楽しそうに屋台を引いていたら実はお医者さんだったっていうのが、医療のへ関心を高めて受診につながるとか、いろんな新しいアクションを起こしていくんじゃないかということです。

コーヒーは物々交換で提供していますが、まず自分たちが楽しむというのが大事で、そうでないと続かないと思います。その中で、病院に行くまでもないけどちょっと相談しようみたいな感じで相談に来られる方が出てきたり、いろんな人たちが集まって地域資源を発見する機会になりましたりして、社会的処方にもなっていました。屋台にはいろんな場所に出ていく面白さがあって、それによって多層的なコミュニティによる多様なネットワークができると思います。つまり、つながりの処方になっているわけです。そんな感じで、小規模かつ多機能な公共空間を目指して屋台をやっています。小規模だからこそ、ちょっと行ってみようかなとなりやすいし、小さいのでそこにいる人同士がつながりやすいのです。

屋台をやってる時に大事にしていることは、お医者さんである守本先生が屋台をやってるっていうよりは、屋台をしてる守本さんっていうのは実はお医者さんな

んだよねっていう、そういう関係性が一番いいよねと思っています。肩書きとか制度で出会うんじゃないなくて、肩書きを多様化することでその人の解像度を上げて、フラットな関係性を築いていくっていうことです。

こうしてイベントをやったり屋台でアウトーチしたりしていたんですけど、結局地域にある居場所っていうのはなかなか作れなかつたと感じたので、空き店舗が目立つ商店街に固定の場を持って、もう少しケアと町をつなぐ拠点を作っていくこうということで「だいかい文庫」を作りました。ケアと本のある場ということでやってるんですけど、相談に来られた方が本を通じて人と会えることもあるし、本が好きで来た方が相談に乗って、そのまま「だいかい文庫」を居場所にしたり、地域のいろんな場所を居場所にしたり、そういう社会的処方も実施できるというような場所になつたりしてます。コミュニティカフェみたいな形になると、やっぱりコミュニケーションが苦手な人は来れないなと思ったので、あえて図書館という形にしました。小規模多機能な公共空間と僕は呼んでるんですけど、ケアからまちへ、まちからケアの図書館型地域共生・社会的処方拠点となっています。

ここでは、屋台とか「だいかい文庫」をきっかけに面白そうだねって来られて、ケアの相談をされて、この場所なら何かできるかもということで相談され、自分のやりたいことを話されて気づいたら支える側にも

回ってたという、そういうような流れになってたりもしています。

服部 世間話の中から医療健康相談になっていったりする人の割合はどんな感じですか。

守本 一割くらいじゃないですか。その割合は「だいかい文庫」になった方が増えてます。無料で入れて、座れるところってなかなかないですから、そういう場所があるだけで全然違います。

高石 一般の方が情報提供するというのと、専門の医師が助言をするのでは受け取られ方が違うこともあると思いますが、注意していることはありますか。

守本 基本的にはそこで診断するということではなくて、あくまでもアドバイスという程度にしています。

高石 相手の方の生き方によっては、すごく辛い思いをして我慢していく、もっと健康が蝕まれるぐらいだったらタバコなんかいいじゃないみたいなことを言いたくなるような時もありますか。

守本 始めた当初は医療モデル的な部分もありましたが、今は生活モデル的な考え方をしてるので、そ



豊岡市内での「モバイル屋台 de 健康カフェ」の様子



だいかい文庫の夜景

いう意味だと、その状況でタバコやめた方がいいですよとか、病院絶対行ってくださいとか、そんなことは言わないです。「だいかい文庫」で働いているケースワーカーにも、医療モデルで考えないでねと伝えています。

大澤 守本先生がそのように考え方をシフトしていかれたのはなぜですか。

守本 いろいろな方にお会いって、本人中心的に考えてたらそうなるよねって気づいていました。目の前の患者さんのことを考えたらやっぱりそうなるよねっていうところと、イギリスの社会的処方や地域福祉などを学んでいく中で気づいていったという感じです。

服部 同じような関心を持つ方は、総合診療医の先生が多いということですか。

守本 医師はそうだと思います。僻地にいることが大事なんですね。ケースワーカーや看護師も専門分化していくなかで、それは私じゃないですって言える環境になればなるほど、人は専門の殻に閉じこもっていきますし、生活が切り離されていくので、総合相談とか、プライマリケア外来のようなものが大事だと思います。

阿部 特に専門性の高い理系の研究者がソーシャルな関心を持つために、例えば医学生とかにどういった教育が必要ですか。

守本 基本的には、ケアされないとケアしないと思うんですよね。それがないと、人に頼ろうかとか、ちょっと聞いてみようか思いにくい。ケアされたことで社会や他者に対する信頼性が増していくんだと思うんですけど、それがないんだと思うんです。だから、医学生には現場に触れさせて、困難な状況に陥らせたらいんじゃないですかね。これは助けを受けるしかないみたいな、そういう状況に戻っていくのが大事だと僕は思います。そうやって他世代の人とか、多様な環境の人と出会うような場があると全然違うと思います。

服部 守本先生の活動は、芸術的なものをうまく取り入れておられるように感じますが、それを意識してやっておられますか。

守本 意識しています。それは、面白そうじゃないと人が来ないからです。人は誰でも表現している。彼ら全員がアーティストだと思ってるので、そのアーティストとして、自分らしい表現みたいなものを知ってもらうっていうのは、ある種のウェルビーイングにつながると思います。そういう意味で、芸術的要素を取り入れている感じですね。

高校生を応援する 居場所づくり

◎稻本朱珠さんの場合

2023年12月8日〔金〕18:30-20:00

第2回研究会は、オンライン形式で開催しました。京都府京丹後市にあるroots（京丹後市未来チャレンジ交流センター）の相談員（当時）である稻本朱珠さんをお招きし、高校生を応援する居場所づくりについてお話しいただき（A）、意見交換をしました（B）。（担当：阿部真大）



図1.高校生たちのやりたいことが貼られたボード

稻本朱珠（いなもと・すず）：

京都府京都市出身。同志社大学社会学部卒業。様々な仕事を経験した後、2020年のオープンから2024年まで、rootsの相談員を務める。現在、与謝野町高校魅力化コーディネーター。



roots外観

(A) rootsについてのお話

大きくrootsの機能としては2つあって、1つは居場所としての機能です。学校以外に行く所がないみたいな環境で、ちょっとおしゃれな空気感で、暖かかったり涼しかったりして、しゃべってくれるお兄さんやお姉さんがいて、何か面白い地域の人に会えるみたいな感じの場としての機能と、その上で、高校生がチャレンジするのに伴走して、そのチャレンジを支える機能です。

私自身、中学生のとき、居場所がないっていう感覚があって、学校でも家でも自信がなく、しっくりこないし、将来がすごく不安だったんです。でも、高校1年生のとき、「書き書き甲子園」というプロジェクトに参加して、そこで、家でも学校でもないコミュニティに所属できることで世界が広がって、自分の興味関心があることを大事にしていいんだって思えるようになりました。そのことが原体験としてあります。もう一つ、大学時代に日替わり店長で運営スタッフをやっていったんですが、色んな人が飲食店というツールを使って自己表現する場で、1人でやるとなると難しいことでも、応援したりみんなでやろうよっていう空気ができれば、できることはたくさんあるなって実感したんです。rootsをはじめるにあたっての私のベースには、この2つの経験がありました。京丹後市としては、Uターン率を上げたいという思いがあり、高校としては、高校を地域に開いていくことがこれからの時代、大事だっていう考えがある。そこで、両者と連携ができるいるんだと思います。

私たちは「主体的であること」と「その人自身でいられること」を大事にしています。これは相談員自身

もそうですし、高校生もそうです。また、来てくれる地域の方にも同じように接しています。それが結果として、いろんな人の居場所になっていくと考えています。場所の広さ自体は教室1個分ぐらいで区切ることもできないので、できることは少ないですが、その空間でおしゃべりすることを大事にしています。たとえば、一面の壁にやってみたいことをカードに書いて貼ってもらう企画(図1)と、大人の方から高校生の頃に読みたかった一冊を寄贈していただいて、みんながおすすめしてくれる本で本棚を作ろうという企画(図2)を、オープン当初からやっています。

来ている高校生は、1年間、3学年で50人ぐらいか、もうちょい来てるかな、といった印象です。2年生は探究のプロジェクトがあるので来ることが多いのですが、1年生と3年生は少ないです。2年生で来てくれて3年も継続して来てくれるパターンと、3年生で進路を悩みだして来てくれるパターン等があります。近くにある京都府立峰山高校の学生が多いのですが、他にも京丹後市内のどの高校からも来てくれています。わざわざバスに乗ってrootsまで来て鉄道で帰るとか、迎えに来てもらって帰る高校生もいます。

こちらから積極的に集客をするようなことはしていません。rootsで心地いい人数って、多くても10人ぐらいなんです。自分の大事な思いとか悩んないこと、逆にやってみたいことを話すときの適した空間ってあると思っていて、1対1だとちょっと緊張しちゃうけど、離れたところに1人か2人いるぐらいがちょうどいい空間だと思っています。なので、オープンしたときから数は追わないって決めてて、とにかく濃い関係を一つづきちゃんとつくりしていくことにしています。

(B) 意見交換

稻本さんのお話を受けて、意見交換が行われました。高校生と地域の若い親世代の方々とのコミュニケーションに関しては、オープンからしばらくの間、定期的に「ゆるりroots」というイベントを子育て支援団体(ゆるりら)と一緒にやっていたこと、そこに、保育士に将来なりたいという学生が来てくれたりしたことなどが語られました。不登校の学生に関しては、親からの相談があったこと、その際には、どんなことを声かけしたらいいかとか、仮にrootsだったらどんな対応ができるかということを考えたとのことでした。

社会的処方の関連では、障害を持った方、引きこもりの方や仕事で心身に支障をきたした方などが来られていたことも語られました。「街の姿勢というか、そういうごちゃまぜ感みたいなのは普通にあるっていう感じです」とのことでした(京丹後市・宮津市を中心とし、展開するみねやま福祉会は、老若男女、障害の有無の垣根を越えた「ごちゃまぜの福祉」で知られています)。また、オープンしたときには、峰山高校の校長先生から「rootsは街の保健室だ」、「いろんな人がここで癒されて帰っていくよね」と言われたこと、「そうなったらいいなと思って相談員をやっています」とも語られました。

他にも、居場所づくりにおけるデザインの重要性についてや、「雑談」の意味についてなど、種々のテーマに関して意見交換が行われました。

今回の研究会では、稻本さんから高校生を応援する居場所づくりについてお話しいただきました。社会参加を通して人々の健康を増進する社会的処方は、生活における学校の比重が高まる「学校化社会」においては、高校生にこそ必要なものなのかもしれません。また、それは大学で行う「雑談カフェ」の意義と重なるところも多いかもしれません。そうしたことにつきづかされるとともに、「待つこと」と「信じること」の価値を信じる稻本さんの熱意にも心動かされる、貴重な研究会となりました。



図2.rootsの本棚

心理職の立場で 社会的処方を行うこと

◎福島沙紀さんの場合

2024年1月17日〔水〕18:30-20:30

第3回の研究会は、一般社団法人プラスケアで活動されている福島沙紀さんをお招きしました。研究チームには、私(大澤)を含めて2名の公認心理師／臨床心理士の資格をもつメンバーがいますが、福島さんも公認心理師／臨床心理士です。病院で心理職として働いていましたが、その病院を飛び出し、今は地域の中で「暮らしの保健室」、大切な人を亡くされた方のためのグリーフケアの場である「あのねの部屋」の活動をしておられます。

同じ心理職として、地域の中で社会的処方を実践しておられる福島さんに、「雑談・屋台カフェ」活動を行う上での大切なポイントや注意すべき点について教えて頂きたい。また、心理職が社会的処方の活動に関わることについてのお考えもお聞きしてみたい。そうお願いし、事前にお送りした質問にお答え頂く形でお話していただきました。また、私たちからも、この前月にスタートした「雑談・屋台カフェ」の活動をご紹介しました。お互いに活発に意見や情報が交わされ、あっという間に時間が過ぎていった会となりました。



1階メインスペース

福島さんのお話を通じて、心理職としての専門性を活かし、周りをうまく巻き込んで協働・連携していくれば、心理職が社会的処方に関わることで、暮らしの中でできるケアに多様性が生まれる可能性を感じました。その必要性や価値を同じ地域・コミュニティで暮らす人たちと共有できれば、心理職の活動の場がさらに広がっていくように思います。また、社会的処方の実践では、処方する側がとことん無知の姿勢で楽しむことを大切にしていると話され、「好きなもの、得意なものが一つあれば大丈夫!」という福島さんの言葉にも励されました。さらに、その場を「閉じない」ことを大切にされていることも教えて頂きました。いつでも誰もがふらりと立ち寄り、コーヒーを飲みながら「あのね」が言える場として、日々の暮らしの中にあり続ける「暮らしの保健室」や「あのねの部屋」。雑談・屋台カフェもそんな場として大学に根付き、文化になっていくことを考えるきっかけにもなった会でした。(担当:大澤香織)



入口

福島沙紀(ふくしま・さき)：

一般社団法人プラスケアで、公認心理師、臨床心理士、コミュニティナースとして勤務。親を亡くした遺児の心のケアを行う「レインボーハウス」の存在から、グリーフケアが病院や相談機関ではなく、日々の暮らしの中で行われていることを知る。その後、病院臨床の経験から、地域の中でグリーフケアを行う場の必要性を感じようになる。一般社団法人プラスケア代表の西智弘先生との出会いをきっかけに、2018年4月より大切な人を亡くされた方々のための「あのねの部屋」を開室。

アートプロジェクトが作る 地域のつながり

◎雨森信さんの場合

2024年7月17日[水]18:30-20:30

アートの分野において、社会との関係や支援はどのように考えられているのでしょうか。大阪市が行う地域密着型のアートプロジェクト「ブレーカープロジェクト」を統括してきた雨森信さんに取り組みの実例をご報告いただき、地域とアートの関りなどについてお話ししいただきました。(担当:服部正)



図1. ブレーカープロジェクト開催エリア、実施場所マップ

雨森信(あめのもり・のぶ) :

京都市立芸術大学美術学部卒業後、設計事務所、ギャラリー勤務を経て、フリーランスのキュレーターとして活動。2003年から大阪市と立ち上げた「ブレーカープロジェクト」のディレクターを務め、2024年まで地域に根ざしたアートプロジェクトに取り組んできた。大阪だけではなく、様々な地域の芸術祭などに関わっている。大阪公立大学都市科学・防災研究センター客員研究員、関西学院大学非常勤講師、甲南女子大学非常勤講師。



雨森 大阪市の文化事業の一環で2003年に始まったブレーカープロジェクトという地域に密着して行うアートの実践プロジェクトを手がけてきました。2024年3月に21年目で終了することになったのですが、そのディレクターを務めてきました。同時にインディペンデントキュレーターとして他地域の芸術祭などでも活動しています。

大学時代は染織を専攻していくつくる側だったのですが、アートが社会とかけ離れていること、経済効率が重視される中で価値観が均一化していることに違和感を持つようになり、個性や創造性が失われつつある中で、芸術と社会をつないでいくことで生きにくい社会を変えていくことができるのではないかと考え始めました。

アートプロジェクトとは、実社会の中で取り組まれるアートの実践で、制作のプロセスを複数の人々と共有すること、活動・出来事をつくるような新しいアートの取り組みであること、地域の場所や人、記憶などと深く関わっていることに特徴があります。またアートと社会の関係性を再構築する取り組みといえるのではないかと自身は考えています。

ブレーカープロジェクトの活動は、かつてフェスティバルゲートがあった浪速区の新世界をベースにスタートし、徐々に西成の方にも南下していきました(図1)。芸術と社会の関係性を再構築し、文化芸術の裾野を拡大していくことを通じて、私たち一人ひとりが想像力・創造力を取り戻し、多様な価値が共存・共生する持続可能な地域社会が創発されていくことをミッションとしています。

アーティストと共に様々なプロジェクトに取り組んできましたが、まちを歩くことから始まり、プロセスの中



図2「西成・子どもオーケストラ」活動風景 2012年2月 撮影：仲川あい

で地域の人々と様々な関わりを生み出していくことに注力してきました。アートプロジェクトでは掃除と挨拶が重要です。空き店舗や廃屋を使用する際、最初は怪しんでいる近隣の方々も一生懸命掃除をする姿を見て信頼してくれるようになります。リサーチをベースにしたプロジェクトでは、こちらから出向いていくので、これまで出会えなかった人たちに会える機会になります。地域の人にとっては価値がないと思っているような場所にアーティストの視点で新しい可能性や価値を見出し、普段はスポットが当たることのない個人の記憶や暮らしを再評価することにつながっていると実感するようになりました。

地域と連携したプロジェクトとしては、音楽家の大友良英さんと児童館の子どもによる「西成・子どもオーケストラ」という、即興でアンサンブルを作っていくものがあります（図2）。厳しい状況で育っている子どもたちが多い地域で、楽器ができなくても楽譜が読めなくても誰でも参加できるという点が、重要なポイントだったと思います。連携先の児童館の先生には、「ミュージシャンという専門的な技術を持つ人がいることで、自分たちでは引き出せない子どもの力を引き出してくれる」とおっしゃっていました。私たちの活動を一つの「社会資源」と捉え、つながっていくことの意義を認識してもらっています。このように、活動を面白がって協力してくれる方々を「地域コーディネーター」と勝手に名付けて意識的に頼っていくようになりました。

呉夏枝さんのリサーチとしてのワークショップ「編み物をほどく・ほぐす」は、高齢者施設と連携して取り組みました。その活動をさらに地域に開いていくうと、元たんす店を改装して開設したのが、kioku手芸館「たんす」です。

小学校跡を活用した「作業場@旧今宮小学校」（図3）では、きむらとしろうじんじんという作家と、場づくりの実験を行なっています。運動場の倉庫で眠っていた陶芸のガス窯や、工具、学習園など、そこにあるものを活かして、月1-2回、場を開き、参加者とともに場をつくっていくというプロジェクトです。参加者の年齢層は未就学児から80代の方まで幅広く、継続して参加するコアメンバーや新規の方が常に混在していて、風通しの良い状況が生まれています。

活動を通して見えてきたことは、個々の創造性をエンパワーメントしていくこと、地域の再発見や再評価につながっていくこと、人と人とのつながりなど、芸術文化の領域に留まらず、社会や地域への波及効果があるということです。

高石 ブレーカー という言葉は「破壊」のイメージがありますが、実際には風通し良く、地域といろいろ外との交流とか、横のつながりを作つておられることがよく分かりました。それだけでなく、長期的な視点、世代を一つ送るぐらいの縦のつながりへの意識も最初からおありだったのでしょうか。

雨森 活動を始めて1年経った頃、最低でも10年はやるべきプロジェクトだと思いましたが、10年はあつという間で、10年経った頃には、30年は続けないと、と考えるようになりました。こういったアートの実践が地域と深く関わっていくことで化学反応が起こり、人の意識が変化する、その結果、まちが少しずつ変わっていくのではないかという仮定を元にした長期的な実験でもありました。

阿部 資本主義的で開発主義的な圧力によって面白い地域がどんどんジェントリフィケーションされていく中で、いかにアジール的な場所を配置していくかという時に、アートはすごく重要なツールになると改めて思いました。その際、大阪の西成ならではという意味はありますか。

雨森 自ら西成という場所を選んだわけではないのですが、活動していくなかで、この地域で継続していく意義を見出していました。日本の近代化や戦後の高度経済成長の影の部分が顕著にみられるエリアで、その場所について知ること、向き合っていくことは、未来を考えていく際に不可欠だと考えるようになったんです。一方で、活動してきた21年の間にもどんどん資本が入ってきて風景は様変わりましたし、私たちのような小さな取り組みが大きな経済の流れに対してどれだけ抗えるのか、常に悩みながら……。

阿部 この地域の庶民の創造性というか、上からではなく下から沸き起こるようなところに、雨森さんが惹かれているという面もありますか。



図3.「作業場@旧今宮小学校」活動風景 2017年3月



図4. ファッションブランド《NISHINARI YOSHIO》の立ち上げに向けた活動風景
kioku手芸館「たんす」にて 2017年11月

雨森 古い町並みや昔ながらのつながりがまだ残っていることは、プロジェクトにとって欠かせない要素だったと思います。何年経っても新しい出会いや発見の連続で、それが継続していく原動力にもなっていました。商売をやっている家も比較的多いのですが、「本社に確認します」ということがほとんどない個人商店なので、話が早い。という意味でも、繁華街やオフィス街など開発された町ではできなかったんじゃないかなと。

服部 どういう基準でアーティストを選んでおられますか。

雨森 批評的な視点を持っているか、日常のささやかなこと、他者と一緒に何かすることを面白がれるかという辯りがポイントです。

大澤 地域住民の方々にとってこれがどういう体験になっていて、どのような形で残っているのかという点はどうでしょうか。

雨森 Kioku手芸館「たんす」では、最初のプロジェクトを経て地域の女性たちの居場所になりつつあったことから、創造の場として継続していくことにしました。ここに通い続ける女性たちが、自分の殻を破り、創造的に開花していくという変化を目の当たりにしたことは大きかったです。西尾美也さんとのプロジェクトでファッショングラン「NISHINARI YOSHIO」を立ち上げた後、市の事業から独立して一般社団法人で運営していくようになっています(図4)。「たんす」の立ち上げから関わっていた事務局メンバーが、アーティストと地域のおばちゃんたちをつなぎ、マネジメントを担っているのですが、継続するための経済的な基盤をどう作っていくのか課題となっています。

服部 専門的なケアとか支援が必要そうな人に出会うような場面はありましたか。

雨森 何度かありましたが、まずは誰に相談すればいいのかをつながっている地域の方に相談しました。私たちは医療や福祉の専門家ではないので、自分たちではできないことを無理に抱えないようにしています。

キャンパスでの 社会的処方の続け方

◎鈴木健一さん・船津静代さんの場合

2024年9月4日 [金] 16:00-18:00

第5回研究会は、初めて対面形式で開催しました。名古屋大学のキャンパス内で「夕方さんぽ」に取り組む鈴木健一さん、「さんぽdeキャリア」を実践する船津静代さんを甲南大学にお招きし、大学での社会的処方の活動とその持続可能性について意見交換をしました。対面のメリットを生かし、両大学の学生支援の関係者も加えた拡大版の研究会としました。

(担当：大澤香織・高石恭子)



「夕方さんぽ」終了後の感想共有

鈴木健一（すずき・けんいち）：

名古屋大学学生支援本部副本部長・学生相談センター長・心の発達支援研究実践センター教授。心理臨床の専門家として人と人との関係がどのように人の成長をもたらすかの研究を行うと同時に、個別のカウンセリングからコロナ禍での食糧支援まで幅広い学生支援の実践を展開している。

船津静代（ふなつ・しづよ）：

名古屋大学学生支援本部・キャリアサポートセンター准教授。企業での経験を活かし、キャリアカウンセラーとしてさまざまな新しい取り組みに挑戦している。コロナ禍で学生支援本部が始めたYouTube配信のラジオ番組では「カウンセラーコロナ」として登場する。



誰かと思いを通わせる夕暮れ時のさんぽ

鈴木　名古屋大学の学生支援本部は、学生相談センター、キャリアサポートセンター、アビリティ支援センターという3つの部署から構成されていて、それぞれがターゲットにしている学生さんを対象としたグループ活動を展開しています。

学生相談からは、その中で「夕方さんぽ」をご紹介しようと思います。これは2022年10月に大学院生が企画を持ち込み、学生支援本部の主催で始まった月1回2時間のイベントです。その学生さんは社会人だった当時お父様を亡くされて、自助グループに参加しているなかで、自分の思いを語ることを通して救われていった。その経験をもとに「夜さんぽ」という、散歩しながらトークテーマに沿って語り合う地域のプロジェクトを主宰していたのですが、それを学内でも学生対象にしてみたいということになりました。

多少の雨でも、また寒い冬はカイロ持参で、参加ルールの説明を受けた後、少人数のグループに分かれています。敷地内を90分歩きます。敷地の広さは確かに70万平方メートル。ディズニーランドが50万平方メートルなので、何となく規模感がわかると思います。参加人数は1回あたり数名から二十数名です。これまでの23回で、約298名、実人数を数えたら199人で、1回だけの参加者とリピーターと両方がいます。とくに留学生や他大学から進学してきた院生は、すでにできているコミュニティに入ることが難しく、コロナ禍ではその孤立が心配されていました。そういう学生にとっては、ここが人と話せる貴重な場になっていたりします。

高石 確か、トークテーマは小さな冊子に書かれたものが配られていました。どんな工夫がされているのですか。

鈴木 6つあるトークテーマの内容は毎月少しづつ変えますが、「昨日の夜ご飯は……」といった浅い話題に始まり、「好きな映画は……」「過去に戻れるなら……」「誰かが支えてくれた経験は……」と内面に入っていき、最後は「私が大切にしていきたいことは……」など、将来を語るように構成されています。さんぽの後は全員で集まり、感想を共有する機会をもちますが、普段考えたとしてもあまり誰かに喋ることのない話をして、誰かが聴いて、質問してくれたりすることによって心が温まる体験を学生さんはしているようです。企画者の学生は大学院を修了し、別の院生がその役割を引き継いでくれています。

「さんぽdeキャリア」への展開

船津 私はキャリアセンターで就職相談をしています。名古屋大学には年に1回ホームカミングデーというイベントがあるのですが、これが30年前、40年前の卒業生に来てもらって名古屋フィルの演奏会を開くような魅力の乏しいものになっていたところ、卒業してすぐの子たちが「何か自分たちもやりたい」と言ってきたのをきっかけに、学生支援本部担当企画として



主催：名古屋大学学生支援本部
協力：LOVE LIFE PROJECT（名古屋市主催の「ナゴヤをつなげる30人」で賛同したプロジェクトです。）

「夕方さんぽ」ちらし

2023年から始めたのが「さんぽdeキャリア」です。

卒後2年目の社会人有志（就活サポーターOB）が夕方さんぽの方法を踏襲して準備し、当日は現役生も交えた初対面のグループで1時間ほどキャンパス内を散策しました。トークテーマは「キャリア・働く・日常」にして、「昨日の仕事はどうでしたか」みたいなところから、「転職考えたことがありますか」といった深いことに進んでいく。対面でなく同じ方向を向いて話すので対立にならない、屋外だと相手の話に耳を傾けないと聞こえないからよく聞くというのがよい、といった感想が聞かれました。

大澤 ゼミの学生と卒業生などの関係を見ていると、学生が訊きたいことに先輩が答えてあげるという一方的な関係性になりがちですが、そうじゃない感じですか。

船津 こちらは卒業生の会なので、学生の話も拾ってもらいますが、基本的には「大人の日常の話」になる感じです。この試みは好評で、継続していく予定です。

つながりを見つける「雑談・屋台カフェ」

大澤 人と地域とのつながりで人を元気にする「社会的処方」。喫煙等と同じように寿命に影響するという社会的孤立を解消するものとして、近年注目を浴



「さんぽdeキャリア」ちらし

びています。国内外の調査では、若者が最も孤立や孤独を感じやすいとされており、大学生もまさにその世代です。そんな学生たちに垣根を越えた、新たなつながりを見つける場を提供しようという取り組みが「雑談・屋台カフェ」です。これまで、さまざまな学部学科の学生や教職員が毎回40-50名くらい参加して下さり、リピーターもいます。留学生と学生がコーヒー片手に輪になって雑談した回や、屋台の横で体育の先生が持って来て下さったモルックをやった回もあります。離れたキャンパスやゼミにお邪魔する出張カフェも行いました。

甲南大学は大学院よりも学部の学生を中心。いろんなチャンネルがあることで多様なつながりができるという一例として、こういう屋台があるって見せられるといいかなと思っています。楽しそうな、遊んでいる大人がいて、その大人と一緒に楽しんでる同級生や先輩後輩がいる。そこから新たな世界や価値とつながって、孤独が解消されたり、知らない自分を見つめたり。学生と教職員とが面白がれるフラグがあちこちで立っていく文化、風土ができる、それが続いていることが、学内での社会的処方の在り方になっていくと思います。

これからの活動のあり方・続け方

鈴木 回が進むにつれて、何か感じたことはありますか。学生さんの雰囲気とか。

服部 屋台に来る人は多様で、それぞれ楽しんでいて良い感じですけど、やや運営スタッフ側が固定化していく傾向がみられます。それが今の課題だと思っています。あと、最近の傾向として、非正規職員の方々が多く来てくださいます。今や大学職員も非正規の方が多い。学生支援とは違う視点ですが、そういう方々の居場所も実は必要なんじゃないかと改めて思われます。

船津 甲南のほうは垣根が低く、ゆるい感じがある一方で、名大のほうはルールがきっちり決まっていて、枠組みがある。これは文化の違い、大学のカラーなのでしょうか。

服部 構造的な違いでしょうか。屋台カフェは嫌だつ



「夕方さんぽ」活動の様子

たらその瞬間で離れればいいので、そこまでルール作りをする必要がないかと。夕方さんぽは始まってしまうと途中で抜けにくい。それに比べると、自分を守ることが簡単な場なのかなと思います。もう一つ、アートの分野でのこういう活動って、いきなり何のルールもなく始まってしまうものなんです。そのアナーキーさや戸惑いが、かえって新しい関係性をつくる。それをヒントにしている部分もあるので、あまりコントロールせずにその場に委ねてます。

大澤 いろんな場があるといいですね。「夕方さんぽ」のチャンネルに入りやすい子と、「雑談・屋台カフェ」のチャンネルに入りやすい子っていると思うので。

高石 お話を聞いていて、それぞれのメリットとデメリット、できることとできないことがよりクリアになつた気がしました。今後どうしたら甲南大学の新しい文化として持続していくか、お伺いしてみたいです。

鈴木 こんなすてきな活動ですって、寄付を募るのはあるかな。

参加者 実施する人、人のグループをどう育てて維持するかもあると思います。例えば学生のサークルにするとか、職員さんに自由活動として参加してもらうとか。

服部 必要なものは全てそろえたし、3年目以降はコーヒー豆代さえあれば自走できる。屋台に「スタッフ募集」って出して、「やりたい人はこの指止まれ!」みたいに変えていけるかなとも思っています。

美術館と地域のつながり

◎大政愛さんの場合

2024年11月27日[水]18:30-20:30



第6回研究会は、オンライン形式で開催しました。福島県耶麻郡猪苗代町にあるはじまりの美術館の学芸員である大政愛さんをお招きし、美術館と地域のつながりについてお話しいただき(A)、意見交換をしました(B)。(担当:阿部真大)



はじまりの美術館の外観



ohaco cafe の様子（ワークショップで使用時）

大政愛（おおまさ・あい）：

はじまりの美術館・学芸員。愛媛県生まれ。2014年筑波大学芸術専門学群洋画コース卒業。2016年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現科修士課程修了。2016年より現職。はじまりの美術館では主に展覧会の企画運営、アーカイブ事業、アートによる部門間連携、WEBメディア更新などを担当する。

(A) はじまりの美術館についてのお話

はじまりの美術館の概要

はじまりの美術館は、2014年6月に開館しました。人の表現が持つ力や、人のつながりから生まれる豊かさを大切に考え、様々な人が集まる場所として開館しました。長期的な目標として、福祉とアートが同居するこの場所が、寛容で創造的な社会へと開かれていくきっかけとなることを目指しています。美術館の建物は、「十八間蔵」と呼ばれていた酒蔵を改修してできた建物です。

最近は、年に5回ほどのペースで企画展を実施しています。これまで、200人を超える作家の方々を紹介してきました。企画展ではテーマを設定し、障害のある作家の方や現代アートの作家の方の作品を展示し、企画によっては民芸品などを展示することもあります。また、展覧会に合わせて体験型の作品を展示することもあります。体験できない展示のときも、参加者、来場者の方が主体的に参加できる仕組みをつけています。

運営母体は、福島県郡山市にある社会福祉法人安積愛育園です。こちらの法人では、誰もが暮らしやすいまちづくりを理念に、1967年から障害のある方の支援事業を行っています。美術館は、その公益事業という位置づけで運営を行っており、博物館指定施設にもなっています。

同じ目線でつながる美術館

建物は、北側3分の2が展示室、南側3分の1がohaco cafeと呼ばれるカフェ兼ワークショップスペースになっています。展示室には、靴を脱いで入ります。長靴で

来られた方もヒールを履いて来られた方も、皆さん靴を脱いでいただいて、同じ目線でいろいろな表現に近くで触れていただいております。

企画展に合わせて、イベントも行います。例えば、作家の方に来ていただいて一緒に物を作るワークショップや、展示の空間で体を動かすようなワークショップなどを行っています。また、カフェは無料で入れるエリアになっているので、地域の方と美術館に来られたお客様が偶然、会える場にもなっています。

また、はじまりの美術館の特徴として、「寄り合い」という活動を行っています。これは、地域の方とつながり、ともに様々な活動に取り組む場と捉えています。もともとは、美術館が急に建っても地域の方は来ないのではないかと思いつき、町民ワークショップのような位置づけで、いろいろと企画する集まりを開館前に行ってきました。この寄り合いは現在も続いている。

美術館に集まる人々

美術館に来られる方としては、展覧会を見に来られる方が1番多いですが、それ以外の方でも、観光でふらっと来られる方、ワークショップやイベントだけ参加したいという方、見学や研修、視察にチームで来られる方もいらっしゃいます。もう少し目的を持った方だと、はじまりの美術館に相談したいと来られる方や地域の方もいらっしゃいます。

地域の方の中には、常連の方が一定数いらっしゃいます。猪苗代で生業をされていて、その仕事の途中でちょっとコーヒーを飲みに立ち寄られたりとか、冬の時期、スキーのお仕事を終えてからコーヒーを飲みに来たり、美術館を見に来るのがルーティンワークになっている方もいます。新しく猪苗代にやってきた方を誰かに紹介したいという時に、はじまりの美術館に連れてきてくださる方もいます。ここに来ると、少なくとも私たちスタッフはいて、さらに運が良ければ他にも誰かいるだろうというので、誰かとつなげる目的でここに来てくれる方がいらっしゃるのだと思います。また、障害のある方やそのご家族、福祉施設のスタッフの方やご友人も、美術館に集まっているからです。

「はじまり」の美術館という館名には、スタートの意味とオリジンの意味、どちらの意味も込めています。表現や作品、人や出来事など、ここで何かと出会い、日常とつながり、何かが「はじまる」。そんなきっかけがつくれるように、日々、美術館を運営しています。

(B) 意見交換

大政さんのお話を受けて、美術館の運営、ダイバーシティとインクルージョン、相談業務、地域の方との繋がりなど、様々な観点から意見交換がなされました。その中で特に印象的だったのは、大政さんの美術館やアートの捉え方でした。「どこまで美術かアートかを追い求めすぎると何も身動きできなくなってしまうのではないか」、「美術館の捉え方を柔らかく変容していかたい」といった言葉からは、大政さんの柔軟な考え方を垣間見ることができました。そのような思考の中でこそ、はじまりの美術館のユニークな取り組みは可能となるでしょう。また、我々の実践する「雑談・屋台カフェ」に関しては、「それがどういう物語の中で生まれてきたもので、どういうストーリーがその先にあるかみたいなところは、アートにつながってくる可能性がある」との言葉をいただきました。アーティストの物語やストーリーを大切にする姿勢は、はじまりの美術館の企画展の展示内容にもよく表れており、大政さんならではの捉え方を感じました。

今回の研究会では、大政さんから美術館と地域のつながりについて、具体的にお話しいただきました。人々の孤立を防ぎ、社会参加を通して健康を増進する社会的処方は、その舞台となる「場所」がないと成立しません。そうした場所をつくるのに、アートの力がいかに有用かを学ぶとともに、それを成立させようとする人の熱意や創造性がいかに重要かを学ぶ、貴重な研究会となりました。



展示室の様子（「きになる→ひょうげん2024」展示風景）

公開研究会

美術家・山村幸則、自作を語る： 私が町に表現を運ぶ理由

このプロジェクトでは、主に医療の領域で注目されている社会的処方の取り組みの多くがアートの領域での実践と非常に親和性が高いという点に注目してきました。1年目の活動の集大成となった公開研究会(図1)では、町で表現を行い、それを通じて多くの人との関りを生み出してきた美術家の山村幸則さんをお招きし、作品の意図などについてお話を聞かせていただきました。また、聞こえない人、聞こえにくい人にも参加してもらいやすいように、長津結一郎さん(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)にオペレーションをお願いしてUDトークによる字幕を表示を行いました。会の最後には雑談・屋台カフェの実演も行い、フラットに意見交換ができる場をつくりました。約60の方にご参加をいただき、多くの好意的な感想をいただきました。*本項目の漢字かな表記は山村幸則氏の意向に沿うものです。

2023年2月23日[金・祝]14:00-16:00

会場：甲南大学岡本キャンパス 10号館1階 10-12教室

講師：山村幸則(美術家・大阪芸術大学教授)



第一部

講演「私が町に表現を運ぶ理由」

今から私が町に表現を運ぶ理由についてお話をさせていただきます。それは大きく二つに分かれています。一つは移動式の作品でもう一つは屋台式の作品です。ですが、そもそも制作のときに移動する作品をつくるんだとか、屋台をつくるんだっていうふうには始まりません。まずは、何を自分がつくりたいのかという問い合わせから始まり、物を運ぶ前に自分の身をその場に運びます。そこで制作が始まります。いくつかの作品を順に紹介してゆきます。

まず2005年の《Kiosk ya Chai》という作品(図2)です。ケニアのナイロビで制作したものです。当時は凶悪犯罪都市とも言われていて、色々な怖いニュースも耳にしながら現地に入りました。市内にあるゴーダウン・アートセンターという施設で滞在制作をしたのですが、ある日、そこに向かって歩いていると、昨日まであったお店が違法出店ということで政府に取り壊されました。この事件に遭遇した瞬間に、これが何か自分の表現に繋がらないかなと思いました。店主は夜通し木材を盗まれないように見張っているんですが、彼に「机とか椅子を分けて下さい」とお願いして、それをセンターの展示室に運んでもう一度そこでお店をやってもらえないかと声をかけました。会場では、店主がチャイを入れて、もう1人の若いお兄さんが揚げパンを揚げてくれました。

山村幸則(やまむら・ゆきのり)／美術家・大阪芸術大学教授：
1972年兵庫県神戸市生まれ。大阪芸術大学芸術学部工芸学科陶芸コース卒業。ノルウェー王国国立オスロ芸術大学大学院修士課程修了。美術家として国内外で滞在制作、プロジェクト、展覧会、ワークショップなどを数実施。平成22年度神戸市文化奨励賞、令和2年度兵庫県芸術奨励賞受賞。



図1.研究会ちらし(表)



図2.《Kiosky Chai》2005年、ナイロビ／ケニア、撮影：Morris Keyonzo

ある日、突然破壊されたお店を見て、何か悲しみを喜びに変えられないかなとか、破壊を創造に変えられないかなと思い、自分はそれを借りるだけなんですけれど、展示空間にこういう空間をつくりまして、一杯のお茶と揚げパンを召し上がってもらえるようにしました。この作品で今思うことは、境界線をちょっと曖昧に出来たらなとか、貧しい方とか普通の生活をされてる方、裕福な方など、色々な人間の生活があるけれども、この空間に入れば、何か全てイーブンで素敵な時間を過ごしてもらえたらしいなと思っていました。

同じ年にドイツのベルリンに行きました。ベルリンの壁の崩壊の15、16年後なんですが、とにかく町にあふれる落書きに圧倒されました。そして、徐々に自分も落書きで作品表現が出来ないかなと考えるようになりました。壁の崩壊から時間が経ってるのに、まだ現地の方々の日常の会話の中では東と西のことがすごくたくさん出て来ましたので、その東と西という言葉をドイツ語と日本語で視覚化して、それを自分が運びたいと思いました。そうやってつくった文字の立体物を台車に載せて、30本位のスプレー缶を積んで町に出ました（図3）。旧東と西の地域を行き来しながら1日この移動式の落書きを運んで、町中で偶然出会った人に好きなようにスプレーで描いて下さいとお願いしました。その人たちと何か表現が出来たらいいなということです。

これを引いて歩くことは結構な重労働だったんですが、1日の終わり頃に、引いてる壁だけじゃなくて、

しんどそうにこれを引いてる僕の姿も含めてみんなは見てるんじゃないかというのを初めて意識しました。ここで、もしかしたら自分も含めて作品をつくって移動するということ自体を表現出来るのではないかと思いました。

世界を旅していると、日本らしい作品は無いのかとよく聞かれます。そこである夏に、神戸市立相楽園の門を叩いて、日本庭園で制作をさせて下さいと、半ば無理やりお願いして制作した作品（図4）もあります。園内に生えている松を園長さんに引き抜いてもらいまして、庭師の方の協力を得てリヤカーの中に積みました。我々が盆栽の松を見ると反対に松に世界を見てもらおうというものです。走楽園と命名して神戸の町に出ました。何ヶ所かで走楽園を停めまして、出会った



図3.《Berlin Graffiti Walk》2005年、ベルリン／ドイツ、撮影：山村幸則



図4.《走楽園》 2008年、神戸／日本、撮影：大野博



図5.《たこやきや》2009年、神戸／日本、撮影：大野博

方々に、お茶と落雁をおもてなししました。

いつもそうなんですけど、出発前は無事に帰れるんだろうか途中でパンクしたらどうしようとか、警察に職務質問を受けたらどうしようとか、結構リスクを負いながらですが、どうしてもやりたいのでさせて頂いております。

2009年当時、神戸の学校に勤めていたのですが、毎日職場と家の往復をしていると何か変化が欲しくなって、3ヶ月間神戸港の突堤で生活を始めました。日常を非日常にしたいとか、偶然の連鎖を期待して飛び出す訳です。海の上から学校に出勤してまた海の上に帰ってくるという奇妙な毎日でした。そんなある日、タコ釣りをしている1人のおじさんにお会いました。「君もやってみたらどうか」と言われまして、すぐに道具を揃えてやってみるとその日に釣れちゃったんです。それがもう楽しくて楽しくて、釣ったからには飼育しないといけないと思って水槽を買いました。タコの墨を使って看板をつくったり、散々タコで勉強させて頂いた後には命を頂くっていうことで、人におもてなししようと思ってタコ焼きの屋台をつくることにしました（図5）。突堤をうろつき回って廃材を手に入れまして、のれんも手づくりしました。ここに来たお客様には一舟と飲み物はご提供して、二舟目からご注文頂くというようにしていました。それが大好評で、しかもタコが釣れ続けるものですから、イベントで100名ぐらいの方がご来場される会場でも、タコ焼きをご提供させて頂きました

次は《神戸牛とWalk》という作品（図6）です。海外で制作していく「神戸」から来たと言いますと、大体の方

が“Oh! Kobe beef !”って仰るんです。それで、神戸の牛を素材として表現がしたいなと思って始めたものです。牧場に電話をしてこういう理由で牛を見せて下さいとお願いしたら、「出来るんだったら牛を1回引いてみろ」って言われまして、ちょっと引かせてもらおうとしたんですけど、ピクリとも動きませんでした。成牛は手に負えないので、子牛で妥協するしかありませんでした。この牛はゆくゆくは人間に食べられますので、食べられる前にかつてない不思議な経験をさせてあげたいと思ったのもありますし、今を生きるっていうことを自分なりに考えて、これを絶対にやってみたいと思いました。

神戸の開港150周年の記念の年に作品の制作依頼を頂きました。古書店で偶然、開港50周年の記念絵葉書を見つけました。今回、150周年記念の絵葉書を自分がつくりたいと思って、150ヶ所を目標にして神戸を巡ってゆきたいなということで《旅するイカリ》という作品（図7）になりました。そして、港の近くで古い錨を見つけましたので、かつて海の底に沈んでいた錨を陸に上げて、その錨に陸の色々な景色を見せてあげたいという発想で始まりました。これも自分1人では全然制作が出来なくて、色々な方にお手伝いを頂きました。今まで運んで来たものよりはかなりスケールが大きくなっているので、神戸市の方と一緒にまず警察署に行きましたが、色々と質問はされました。最終的には撮影機材ということで許して頂きましたが、作品の前と後ろに警備員をつけるという条件がつきました。

この作品は、こんなに怒られたプロジェクトは無かったなっていう位、色々なところで本当に怒られました。元々は中央区辺りをうろちょろするぐらいで

考えてたんですが、うちの区にも来て下さいというようなリクエストも頂きましたので、頑張って神戸市全区を巡ることになりました。私1人じゃ全然運転出来ませんのでボランティアで色々な方に作品を押して頂くということしました。主に土日祝日に運行しまして、それ以外の時は展示場に駐車しておいて、これまで訪れたところで撮影した絵葉書を貼ってアップデートし、会期中に出来上がってゆくという作品でした。

一応チラシに載っている作品については話し終えたんですが、もうひと押し、町に運ぶのとは違う作品も紹介したいと思います。といいますのが、町に表現を運ぶ理由というのは本当に色々ありますが、それは一言では言えなくて、作品を遡ってゆくことで、その理由がちょっと見えて来るんじゃないかと思っています。

これはかなり前ですが、ノルウェーで制作した陶芸作品（図8）で、自分の作品の中で初めて町中に運んだものです。夜中に友達と重たい陶器をトラックに詰め込んで、広場にその日1日だけ展示をしたものです。オスロの市庁舎に許可を頂いて展示しました。

こちらは町というよりはアメリカの田舎ですが、広大な土地の真ん中に運んだ作品（図9）です。自分1人では運べないので陶芸家の仲間たちに手伝ってもらって、“I need your muscles”と言って運んでもらって設置しました。日本に帰ってきて、CAPという神戸のアーティストの集まりで報告をしますと、出来上がった作品よりも運んでいる時の方が面白いって言って頂きました。そうか、何か完成した作品よりもそのプロセスを共有させて頂くのもありかなと思うようになってゆきました。そして、どこへ行っても同じことをしています。つくったら自分1人では手に負えない。だからお願いをする。そして助けてもらうそのプロセスの中で、いつの間にか手伝ってくれた方々も一緒につくった気持ちになって下さる。そう思って続けています。

表現を運ぶという時に、自分の中ではもう欠かせない作品として「男シリーズ」があります。2006年頃に入院、点滴をするほど銀杏に激しくかぶれまして、通勤車内で人が自分のかぶれた皮膚を見てるっていうことにすごく傷付いた経験から、自分の皮膚の表面を全部変えてみたらどうなるんだろうということを実行した《銀杏男》（図10）から始まって、ポーランドの



図6.《神戸牛とWalk》2012年、神戸／日本、撮影：大西正一



図7.《旅するイカリ》 2017年、神戸／日本、撮影：坂井志奈子



図8.《Texture Object 2》1998年、オスロ／ノルウェー 撮影：Glenn Hagbru



図9.《Infinity Stream》2001年、モンタナ／アメリカ



図10.《銀杏男》2006年、大阪／日本 撮影：大野博

《薔薇男》、アイルランドと神戸の《片喰男》と続いてゆきました。銀杏には雌雄があるということで水都大阪では《銀杏女》にもなりました。自分自身が作品になつて町に出るっていうのが、表現を運ぶすごくシンプルな形なのかなと思っています。

作品の途中経過を振り返って見てくれる人がとても多いということは、きっと作品を仕上げる以外にも何か見所があるのかなということです。10年以上前に「六甲ミーツ・アート」に参加した作品ですが、明石海峡で自分で鯛を釣って、魚屋道という六甲の登山道を登って山頂に鯛を届ける（図11）というものです。明石の釣り船にお世話になって、釣った鯛を電車で六甲山の麓の駅まで運んで、そこから桶を担いで山頂を目指すんですけど、本当にその道のりは過酷でした。

運ぶことで、欠かせないのがこの作品（図12）です。中国の広州で路地に入りますと、色んな面白い椅子が置いてあったので、その持ち主を探し出して交渉して、その椅子を展覧会に貸してもらうというものです。書類を交わして美術館を持って行って、そこでお茶を飲んで頂くという空間になっています。椅子は色々な身分とか地位とかを象徴するものかも知れませんが、「どうぞ好きなところに座ってお茶を召し上がって下さい」とおもてなしをするという作品です。

これが最後になりますが、勤務先の大坂芸術大学で

約30年前に出土した小さな土器の壺に関連した展覧会を行うということで、学生たちが頑張って慣れない土器づくりに励んでいるのに触発されて、自分も出土した土器を拡大した長頸壺の制作を行いました。上半分は会期中に会場内でつくっていたんですが（図13）、とても大きいので来場者の方から「これ一体どうするんですか」とよく聞かれました。でも僕は、どうするんですかっていうようなことをやりたいんですよ。分かって頂けるでしょうか。それしか出来ないんですね、正直に言いますと。何かもしまだまだ続けることが出来るのであれば、やっぱりどうなるか分からないことをやっていきたいということに尽きるのかなと思います。一見、無意味とか、これをしたことによって何が起きるのかとか、そんなのを抜きにして、とにかくやってみたいという感じです。

表現を町に運ぶということからかなり脱線したかも知れないですが、でも脱線することがやっぱり制作の上ですごく大事で、直線でゴールに向かうのではなくて、まわり道とか行き止まりがあつたりとか、色々な道、方法があると思ってまして、それを探しながらやっています。町の中に作品を運ぶっていうのは、自分たちが住んでいない世界と繋がっていることが実感出来たりとか、そこで何かやってみたいと思ったら、何か方法があるはずで、それを信じてやりたいと思っています。不特定多数の方にご覧頂けるのが私の中では大事な



図11.《六甲 meeets とや》2013年、神戸／日本 「六甲ミーツ・アート 芸術散歩2013」
撮影：山村幸則



図12.《縁の段段茶亭》2015年、広州／中国、撮影：山村幸則



図13.《時ノ壺 令和大壺》2024年、河南町／日本 撮影：山村幸則

ことで、ギャラリーや美術館を訪ねたら、当然作品があるのですが、街角を曲がったら何か訳の分からぬ文字を引いている人がいたとか、そんなのがいいのかなと思っています。

第二部 質疑応答

服部 社会全体が、回り道をしないように、最初に何か目標が設定されてそこに向かってまっすぐ行くことが正義であるかのような風潮になっている中で、そうではないことが大事なんだというお話を本当に心に響くもので、私自身の日々の過ごし方を考え直さなければ改めて思わされました。

今回、山村さん自身がどのような気持ちで、あるいはどのような発想で町に表現を運ぶかというお話を聞いていただきましたが、逆に、表現を受け取る側の反応や町で起こる変化について教えていただけますか。

山村 例えば牛を運んだときは、牧場の方から出来るだけ人との接触は避けて下さいと言われていました。牛が何か病気をもらって牧場に帰ってしまうと、とんでもないことになるということです。牛を見たら可愛いと言って近づいて来られる方がいらっしゃると思いましたが、僕はそれよりも接触しないようにということを考え歩いて、もうすごい任務をもって牛を無事に送り返すことに集中していて、余り町の方の反応は考えて

いませんでした。それでも、港からの帰路で牛がかなり鳴きまして、お店が集中している地域で鳴きますと、2階の住まいから窓開けて、「なになに」「牛だ」みたいな感じで、色々な反応があったと思います。見た人は理由を知りたいと思われたと思うのですが、僕は説明は必要ないと思っていて、何だったんだろうというのが嬉しいですね。

走楽園は、引いてるだけではなく一時停車して、お茶とか落雁とか召し上がってもらいながら色々な会話が広がってゆきましたので、立派な枝ぶりやねとか、そこで会話が生まれたことを覚えています。

阿部 地方創生ということについて日本の色々な町を調査してるんですけども、やはりアーティストの方々の入ってる町、彼らが作ってる風景というのは、見て楽しいというか、ちょっと違うなっていうのをいつも感じていて、その感覚をすごく思い起こさせられました。僕自身は普通の大学に通ってたんですが、近くに芸大があって、芸大は楽しいけどなんか普通の大学は殺風景だと思っていました。甲南大学に着任して、イメージはおしゃれだけど遊び心がないと思いました。かっこいいデザインになってはいるけど、代理店的なもので全部デザインされていてアート的なものが全く足りてないという感じです。

アートはデザインとはちょっと別のもので、逸脱とか脱線とかが大切だと思います。町の人との交流で

も、あらかじめ予算が決まってて、これだけのお金を出してこういう感じのものを作ろうっていうのとは、アートは全然違うものだと思いました。

山村さんは、そのようなデザイン的なものと逸脱性のある自由なものとの違いについてどうお考えでしょうか。

山村 デザインにはクライアントがいて、要望に応えてなんばつていうところがあると思いますが、僕の個人的な意見としてはアートは本当に自分のやりたいことを最大限に貫くということに尽きると思うんです。極論すると、自分1人ぐらいこんなことやる人がいてもいいんじゃないかなと思ってまして、それを面白いと捉えたら奇跡ぐらいに思ってます。

私のプロジェクトの中にも、ご依頼を受けて制作する機会がありましたが、その中でもどうやって自分の好きにとか、これだったら誰にも頼まれないくらいやり始めただろうということからずれないように。依頼されていたとしても、自分のやりたい本質的なものをいつも意識しながら表現し続けてます。

服部 アーティストの方も町おこしのイベントとかで、こんな感じでお願いしますと言われることも多いと思いますが、それには応えないのでしょうか。

山村 応えないとは申し上げませんが、自分の中で応えられる部分が見つかったら、もう頼まれなくてもやりたいんですよね。皆さんやっぱり効率重視ですし、成果を求められるんですけど、何かそこばかり考える面白い部分がどんどん抜け落ちていくので、ご依頼を聞いてるふりをしつつ、やっぱり自分のやりたいとを見つけてゆきます。最終的に面白ければ、両者いいわけですから、あまり話を聞かないようにします。やっぱり裏切らないと駄目なんですね。期待された通りであったとしても、それは想定内のこと、それはもう作業になってしまいますから。想定外のことを求めて町に出ますし、外で表現するということはそういうことなのかなと思います。制作の時間っていうのは、表現と向き合うちょっと孤独な時間なんですが、それがある日展覧会がオープンするとか、町に作品を運ぶとかすると、そこでようやく社会と繋がって均衡が保てるというか、健康的でいられると思っています。楽しくしたいっていう思いは一緒であれば、その通り道は色々

あるわけで、それを選択する余地はアーティストにあるのかなと、それを試されてるのかなという風に考えています。

大澤 私が大好きな旅番組があって、それがなぜ人気なんだろうと考えると、視聴者も一緒にその旅の仲間に入っているような疑似体験をしてるような、そんな感じを受けることが理由かなと思っています。今日のお話の中で、山村さんのプロセスが面白いとおしゃった方々もおそらく何か疑似体験をしたような気持ちになって、それでとても楽しかったのかなと思いました。そういう鑑賞者の疑似体験のプロセスを含めて山村さんの作品はあるのかなと思いました。その点についていかがでしょうか。

山村 私の作品の場合、プロセスを無くして完成がありませんので、そのプロセスが、やがて何か搖るぎない物語というか、作品の裏にいつもそれがあるんですね。

タコ焼き屋さんをつくりたいと思ってつくるんじゃなくって、2月、神戸港に住む前は自分がタコ焼き屋を4月頃にやってるなんて思いもしなかったというような、そういう思いもしなかったっていうことを求めてています。そうすると、そのプロセスの中でもう本当に些細なことに自分が感動できますし、それを面白がってくださる人と出会えるかも知れないと思います。

作品をご覧頂くことで感動して頂こうとか、何か面白いと思ってもらいたいとかは、本当にほとんど無くて、僕自身が面白くて仕方ないんです、やってる時は。物事の本質を知るためのプロセスがあって、真実を知りたい、それを楽しんでる感じです。

高石 素人から考えると、制作過程では芸術家はおそらく完全にその作品に丸ごと自分が入っておられて、一体化された中で創作されてると思うんですけど、完成した段階で一旦自分から離れて対象物になる瞬間があると想像しますが、山村さんは出来上がってからも表現を運んでおられる間はまだその一体感の中におられるのかなという気がしました。自分が主体として作品の中に入り続けながら時間をともにするということが、臨床心理の営みとすごく通じるところがあると思いました。山村さんの中で、どこまで作品と一体となっておられるのか、それが対象物となる瞬間がある

のかということをお聞きしたいと思いました。

もう一つ、私達も心理療法の中で絵を描いていたりすることもあるのですが、画用紙に枠をこちらがつけてその中で表現をお願いする場合と、真っ白のまま画用紙を差し出す場合があるんです。先生の作品も、枠のある作品と広い無限の空間の中にある表現と2通りあったような気がしたんですが、いかがでしょうか。

山村 最初の質問ですが、基本的に作品が完成したら自分の手を離してると思っています。ナイロビのカフェでも、最後の瞬間に自分がふっと姿をくらませて、お店を破壊された店主がそこで活き活きてたり、揚げパンを揚げてるお兄さんが楽しかったりとか、それが自分の手を離れたっていうように思える瞬間でした。

枠の有る作品と無い作品については、それを行き来するのが楽しいと思っています。ですので、枠を設ける時もあれば、枠を破壊する時もあります。毎回、出発点としては枠が全くないところから出来ればいいなと思っています。

参加者A 山村さんが表現を運んでいる時に、見てる人はたとえ声をかけなくても、いろいろその作品に対して思うところはあると思います。私は韓国のプサンの作品も見せていただきましたが、それは観客が作品に文字でメッセージを残していくようなものでした。その観客の感想そのものも作品の一部になるんでしょうか。

服部 タコ焼きを振舞う作品で言えば、それを食べる人まで含めてアートなのかということですね。

山村 僕は、そこを定義づけたくないんですね。どう感じるかはそれぞれ千差万別で、そこを自分でコントロールはしたくないと思っています。見てる方それぞれに価値観がありますし、判断基準が異なると思うので、それに委ねたいと思っております。

参加者B 今回は社会的処方というテーマの中で、山村さんのご活動について人ととの出会いの場を作り出すと書かれていますが、むしろお話を聞いていると、ご自身は自分のエゴをやり切りたいとか、孤立した中で作品をつくっておられて、結果として他者と関わるようなことがあるという面も大きいと思うので

すが、その上でご自身の活動とか作品と社会的処方や療法との関わりを、どのようにお考えでしょうか。

山村 表現してる私は、正直なところあまりそこまでは考えていません。これをやったから誰かの役に立つとかではなくて、自分がどうしても知りたい、見てみたいという好奇心で動いています。もしもそれがどなたかの役に立ったら嬉しいと思っています。

服部 山村さんの活動を、社会的処方の枠の中で考えられるんじゃないかと、私達が勝手に思い込んでるところもありまして、その中で無理にお話していただいた部分もあります。

参加者C 松に神戸を見せたいとか牛に神戸を満喫してもらいたいという、物が主体になって外を見るという転換が面白いなと思いつつ、最初の方のナイロビの作品では人との関わりを重視しているように思いました。人との関わりを大事にするということから、何かよく分からぬることをしてみたいというような方向へ、少しずつ変わっているような気がしました。その中で、それ面白いねっていう形で人が集まったり、その過程で色んな人の心が変わったり、その人の枠組みが揺らいだりして、人に何か影響を与えてゆくっていうことがおそらく帰結されたと思うのですが、そのこと自体を目的とする方向に行かなかったのはなぜだろうかと思いました。

山村 自分の作品がそんな風に変化して來るんだということを初めて教えて頂いた感じです。人に影響を与えたっていうのは、全く今まで思ったことが無いです。先の質問の中で素人なのでアートは分からないというご発言もありましたが、僕はもう本当に素人代表なんです、いつも。素人であるがゆえに、いろんな人の力を借りないと実現出来ないです、それでも誰もやったことがないことをやりたいと思うと、もう人に頼るしかない状況なんです。

[活動をふりかえって：担当者小論]

社会的処方における居場所とは？

◎阿部真大



図1.EMANON外観

個人と国家の間に存在する中間集団の多様性が失われつつあるため社会全体が機能不全を起こしてしまっているのではないかという危機意識を持つ社会学にとって、「社会的処方」というアイデアは自然に受け入れができるものである。かつての伝統的な地域コミュニティが喪失したことを嘆くのではなく、それを奇貨として、抑圧的でない新たな中間集団を再帰的に構築していくなくてはならない。社会学がその取り組みに貢献できればとの思いから、私は社会的処方研究会のメンバーとして活動を続けてきた。

中間集団という言葉を分かりやすく言い換えると「居場所」ということになるだろう。現在、問題となっているのは、居場所の画一化のもたらす弊害、つまり、会社、学校と家族以外に居場所のない状態がもたらす様々な問題で、そうした居場所を表す「サードプレイス」という言葉は今や、広く人口に膾炙している。

雑談・屋台カフェというサードプレイスの参考とすべく、私は2年間、日本各地のコミュニティカフェや美術館を視察し、話を聞き、キーパーソンの方々を招いて研究会を開いた。本稿では、その過程を記録しておきたい。

地域と若者をつなぐサードプレイス

研究会の発足当時、私の念頭にあったサードプレイスのイメージは京都府京丹後市にあるroots（京丹後市未来チャレンジ交流センター）という場所であった。「高校生と地域の方々が集い、新たなチャレンジができる居場所」（rootsの公式HPより）たるrootsは、私自身、高校時代に出会えたらよかったなと思える場所だった。

私は1990年代の中頃に岐阜県岐阜市で高校生活を送っていたのだが、学校で勉強、部活をして、外で友人と遊んで、家庭では無愛想にしている典型的な高校生だった。それなりに楽しい高校生活だったのだ

が、何か足りないと感じていたし、その足りなさを不満に思っている同級生も何人かいた。それは「社会との接点」であった。

正確に言うと、社会との接点はあったのかもしれない。しかしそれは、高校生にとって好ましくないものと捉えられていたような気がする。地方都市の大人的世界は前近代的な「地縁」の世界、もしくは非人間的な資本主義の世界であり、未来を夢見る高校生は、そんな世界を知る必要はない。思えば、当時の岐阜には、大人たちが胸を張って高校生たちに提示できるような「社会」などなかったのだろう。

rootsと出会ったとき、一般には「失われた30年」と語られる日本社会の、わずかな明るい側面を見た気がした。経済は停滞している。しかし、この30年で日本の地域社会は大きく変化した。かつての前近代的な地縁コミュニティは限りなく衰退し、それに代わる新たなプレイヤーが登場してきた。その変化の是非を問うことはここではないが、一つ確かなのは、彼らの持ち込んだ、開放的な「新しい公共」のあり方である。詳しくはrootsの相談員（当時）の稻本朱珠さんをお招きした第2回研究会（2023年12月8日）の記録を参照していただきたいが、そこは、地域社会と高校生をつなぐオープンなサードプレイスとしての機能を十分に果たしていた。

リノベーションで地域の過去とつながる

研究会の後、rootsと機能的に等価な居場所を探探し、発見したのが、福島県白河市のコミュニティカフェ、EMANON（2024年2月24日に視察）と、広島県豊田郡の大崎上島にあるミカタカフェ（同年3月17日に視察）である。rootsと同様、高校生の居場所機能を担いつつも、カフェスペースで飲食を提供している点が特徴的で、特にミカタカフェは、高校生がメニューづくりに大



図2.ミカタカフェ外観



図3.「暮らしと風」展示風景

きく携わっているという点が非常にユニークであった。3箇所を訪れて印象的だったのは、どこも古い建物をリノベーションした居場所だったという点である(図1、2)。これが「新しい公共」を地域社会の中で浮いた存在にせず、その過去に繋げる役割を果たしている。文化人類学者のダニエル・ミラーは、人間関係における物質の重要な役割を指摘している。リノベーションされた建築を通じて、新しい公共は地域社会の歴史とつながりを持つ。それは、3箇所に共通する、新しい試みに挑戦しながらも、地域住民やその歴史を尊重する姿勢を象徴しているように見える。新しい公共のハブとなる居場所を巡る一連の視察は、居場所が具体的な実体を持つものであることを再認識し、その物質的側面に着目することの重要性を学ぶ貴重な機会となった。

アート作品のモビリティと居場所

福島県でEMANONの視察とともに訪れたのが、猪苗代町にあるはじまりの美術館であった(2024年2月25日)。はじめは美術館に併設されているカフェの持つ居場所機能について考えるために向かったのだが、美術館を視察し、ワークショップにも参加すると、居場所づくりにおけるアートの持つ力に圧倒された。そこから、私の興味関心は、アートと居場所の関連性へと向かうこととなり、はじまりの美術館の学芸員である大政愛さんをお招きした第6回研究会(同年11月27日)へとつながっていった。

居場所の形成に果たすアートの役割については当該研究会の報告を参考いただくとして、ここでは、福島市のいげたビルの空き地商店で行われた展覧会、「暮らしと風」(同年8月11日に視察)について触れておきたい。この展覧会は福島市の中心市街で行われたのだが、美術館とは異なる小さなスペースでの展示

ながら、作品のもつ存在感が空間全体を覆い、その作品に惹きつけられる者にとって、非常に魅力的な居場所となっていた(図3。はじまりの美術館を居場所と思える人ならば、この空間も居場所と思えるだろう)。アート作品のモビリティは、居場所を持ち運べるものとし、その可能性を拡張する役割を果たす。当該展覧会の視察は、可動性の高い雑談・屋台カフェの可能性を探る上でも、示唆に富む視点を与えてくれるものだった。

2025年2月21日には、茨城県水戸市の水戸芸術館を視察し、ワークショップ「造形実験室」に参加した。参加者の皆さんが楽しそうに取り組んでいる様子が印象的だった。改めて居場所づくりにおけるアートの力を再認識する貴重な経験となった。

以上、サードプレイスと居場所をめぐる視察やインタビューから得た思考の過程を記してきた。新しい公共の価値、物質の重要性、モビリティの可能性など、雑談・屋台カフェという具体的な社会的処方の意義を再確認する機会となった。今後も雑談・屋台カフェの実践に携わりながら、社会学の立場から居場所の問題を考え続けていきたいと思う。

阿部真大(あべ・まさひろ)

文学部社会学科、労働社会学



社会学者。専門は労働社会学、家族社会学、文化社会学。岐阜県岐阜市出身。甲南大学教授。デビュー作『搾取される若者たち』(集英社)では、後に「やりがい搾取」と呼ばれることになる現代社会に特有の労働問題に焦点を当てた。その後、『居場所の社会学』(日本経済新聞出版社)、『地方にこもる若者たち』(朝日新聞出版社)などの著書を発表。J・フィッツジェラルド著『キャリアラダーとは何か』(共訳、勁草書房)の翻訳も手がける。

臨床心理学の教員が、 「雑談・屋台カフェ」をやってみた —実践してみての雑感

◎大澤香織

大学では心理学の教員であるが、心理職として、トラウマによる精神的不調に悩む方々と関わってきた経験がある。その中でずっと感じてきたことは、臨床現場で行える支援・ケアの限界だ。相談や治療を求めてきた時、あるいはどこから紹介されてきた時に初めて当事者とつながり、必要な支援や治療を提供することが可能になる。しかしトラウマは、これまで信じていたもの（他者、社会）に裏切られる体験でもある。一度失われた信頼、安心や安全を取り戻しながら心の傷を回復していくには、「待ち」の姿勢での医療や心理学的支援だけではどうしても限界がある。トラウマ体験者が必要とする支援・ケアに「つなげる」と共に、当事者の方々が暮らしの中で自然と、安心して人や支援・ケアに「つながれる」、その中で回復していく社会・コミュニティも必要なのではないか。そんな思いが今の私の研究につながっている。

その過程で「社会的処方」に出会い、偶然にも、芸術学を専門とする服部正先生が社会的処方に関する内容を授業で扱っておられることを知った。そのことを機に、社会的処方の研究チームに加えて頂き、「雑談・屋台カフェ」活動に参加し続けている。回を重ねる度に、さまざまな立場や年代の人が屋台に集い、コーヒー片手に和気あいあいと雑談する様が、「お堅い」「縦割り」な印象のある甲南大学の風景に少しずつ馴染んできているように感じている。

社会的処方の研究チームが発足する前に、自身の研究での関心から、一般社団法人プラスケアが運営する「暮らしの保健室」を見学させて頂いたことがある。そこで公認心理師／臨床心理士である福島沙紀先生にお会いした。心理職が少ない社会的処方の場に、どのようにして関わることになったのか。被援助者の守秘義務が課される心理職の立場で、オープンな場での活動は実際どうなのか。聞きたいことが次々に浮かんだものの、その日はじっくりお話を伺うことが

できなかった。また、私がトラウマ回復支援の立場から社会的処方に关心をもった経緯、トラウマの治療からドロップアウトした人たちの行き場について、福島先生と交わしたお話がとても興味深く、私の中で印象深いものとなっていた。その後、研究チームが発足し、大学構内で社会的処方を試みるにあたり、同じ心理職の一人として改めて福島先生にお話を伺ってみたいと思い、研究会の講師をお願いすることになった。

この研究会を受けて、雑談・屋台カフェの実践で心がけてきたことがある。それは「無知の姿勢」で、その場を「楽しむ」ことだ。守本先生が第1回研究会で、「まずは実践する自分たちが楽しむことが大切」と仰っておられたが、福島先生もまた、実践の中でとことん無知の姿勢で話を聴き、うまく周りを巻き込みながらその場を楽しむことを大切にされているとのことだった。「それって何？教えて！」と相手に关心と好奇心をもって関わることは、処方のリソースを引き出す。私自身もその場を楽しむだけではなく、無知の姿勢で関わり、雑談を通じて相手の好きなことや得意を引き出してみる、そしてそこになるべく周りを巻き込んでみるとした。そうしてみると、ちょっと恥ずかしそうに、「えー」と面倒くさそうに、あるいは「いやいや……」と謙遜しながら、それでも嬉しそうに話してくれる。表情や声がふと明るくなる。自然と語りが増えていく。聞く側もワクワクする。「○○をやっているんだって！」なんて、つい周りに伝えたくなる……そんな体験となった。

学生や教職員がいきいきと話し、それを周りが楽しげに聞くそれは、雑談というよりエンターテインメントだ。学生や教職員がもつさまざまな個性に触れると、見慣れた大学の風景もまた違って見えてくるから面白い。実施したアンケートでも、その場にいる人との交流を「良かった」「楽しかった」と語る感想が多く、その体験は雑談・屋台カフェに再度訪れる動機にもなって

いるようである。「もっと知りたい」「もっと知ってほしい」「もっと話したい」「もっと聞いてみたい」。そんな思いにかられて集まり、受け入れてもらえる場、共に楽しめる場に雑談・屋台カフェがなっていけば、そこは自ずと大学コミュニティでのケアの場になっていくのではないか。あえて「処方」しなくとも、雑談と温かいコーヒーを介して、気づけば「持ちつ持たれつ」な温かみのある「ケアのやり取り」ができる。そうして普段の生活の中で、誰かと・何かと「そっとつながれる」ハブ的な役割をもつ場となっていくかもしれない。そんな可能性を感じている。

一方で、課題も見えてきた。個人的に気になっているのは、スタッフとして活躍してくれる学生さんたちだ。例えば、昼休みの時間帯だと集まってくる人が多く、学生スタッフはコーヒーを提供することで手一杯になってしまう。そうすると、なかなか雑談する余裕がない。余裕ができた時には、人々は授業や業務に戻っている……その様子が引っかかっていた。社会的処方がもつ良さは、「支援・ケアを受けた人」が自身のもつ力や強みを活用して「支援・ケアを提供する人」になれるところにある。役割が固定化せず、循環していくような仕掛けを少しずつ取り入れてみたらどうだろう。視察した「みやの森カフェ」(富山県砺波市)では、お客様とスタッフの境がなく、皆が「ごちゃまぜ」になってその場を楽しんで「共創」しておられた。例えば、来た人にその場でコーヒーを淹れるのをさせてみる。スタッフはそのサポートをしつつ、淹れたコーヒーを配りに行って雑談する、とか。実際、屋台に遊びに来られた哲学の先生が、学生スタッフたちと楽しそうにコーヒーを淹れて下さったことがあった。コーヒーを待っている学生にミルを渡して、豆を挽いてもらしながら雑談したこともある。このような仕掛け(遊び)をそっと取り入れて、人々をうまく巻き込み、交流の循環が活性化すれば、きっともっと面白いケアの場にな

る。仕掛け次第では、雑談・屋台カフェにはまだ引き出せる遊びの要素や可能性があるように感じている。それを「面白い」「自分もやってみたい」と思って集まる人の輪が広がり、大学の新しい文化として根付いていく未来を思い描きつつ、今後も楽しみながらこの活動に関わり続けていきたいと思っている。

大澤香織（おおさわ・かおり）

文学部人間科学科、臨床心理学



北海道生まれ。甲南大学文学部教授。博士（臨床心理学）。公認心理師。臨床心理士。国立精神・神経医療研究センターと東京女子医科大学での研究員、病院での心理士や学生相談員を経て、2008年東海学院大学人間関係学部助教、2011年甲南大学文学部講師、2022年より現職。トラウマに対する認知行動療法を専門とし、トラウマの記憶想起に焦点をあてた回復支援や予防的心理教育、トラウマ初期支援の教育・研修について研究・実践を行っている。著書に『外傷体験想起時の認知・行動と外傷性ストレス反応』(風間書房、2012年)、論文に『Opinions on the effectiveness and availability of coping strategies for traumatic memory recall among Japanese undergraduates.』(応用心理学研究、2016年)など。

〔活動をふりかえって：担当者小論〕

学生相談からキャンパスの 社会的処方をまなざす

◎高石恭子



図1

学生相談の視座から

学生相談は、戦後わが国的新制大学にアメリカから導入されたSPS (Student Personnel Services) という理念を基礎に置いている。日本が依拠してきたドイツモデルの大学からの脱却と、学生を発達途上の未完成な個人と捉えて「全人的な成長」を促すアメリカモデルの大学への移行が図られた際に生まれた活動である。最近では、その総体を「学生支援」、健康や適応に関する専門的な関わりを「学生相談」と使い分けることが一般的になっている。

私は本学で学生相談のカウンセラーとして35年余り過ごしてきたが、デジタルネイティブ世代が学生になり、コロナ禍を経た今では、人と人との関係性にも大きな変化が生じたことが実感される。コミュニケーションの大半はデジタルな活字や画像を介してなされ、寝食を共にするような身体性を伴う交流は、学生生活の遠景へとどんどん退いている。「全的な成長」を高等教育の使命の一つに掲げるなら、失われつつあるもの、希薄になってしまったものを教育のしくみのなかで補い、回復させる努力はやはり必要であろう。

そのような問題意識をもって、本学の学生相談室では五感の体験を学生同士が共にできる様々なグループプログラムを考案し、正課や正課外の活動として提供してきた（図1、2）。しかし、いずれも受け入れられる数には限りがある。学生はGPA制度の導入後ますます余裕のない生活を送るようになり、特に正課外プログラムへの参加者は思うように増えない。そのような状況への打開策を模索していたとき、本共同研究プロジェクトへのお誘いをいただいた。

「つながり」を処方するという発想との出会い

処方 (prescribing) とは、前もって書く、指示するという

意味の言葉である。医師が行えば、通常は症状緩和のためにどんな薬をどれくらい飲むようにという指示書を指すが、臨床心理学の領域でも「心の処方箋」といった使い方がなされる。こんなふうに考えたら、ものの見方を変えたら、心のつらさが和らぎますよという指示書きである。学生相談でカウンセラーが行うことにも心理的な処方は多く含まれている。

一方、「社会的処方」とは人と人や地域をつなぐ処方であるという。「つながり」を処方するという発想は私にとって新鮮で、それと意識せずにやっていた実践をリフレームする機会になった。学生相談の領域でも、近年は「連携・協働」という機能が重視されるようになっている。たとえば、先進例として、カウンセラーが事務職員と協働してワンストップ相談サービスを行う筑波大学の「総合相談窓口」などがある（図3）。すべての学生の成長・発達の支援を理念に置くとき、密室でのカウンセリングを越えて、様々なつながりのなかで学生を育てることが必須となる。学生相談から「社会的処方」をまなざすと、何が見えてくるのか。キャンパスにおいて、学生相談のカウンセラーはどんなふうに「つながり」の処方の創生に関われるのか。約2年間のプロジェクト参加をとおして学び得たことは、別稿にまとめたとおりである（高石, 2024 ; 2025）。

チームメンバーへのインタビューから

「雑談・屋台カフェ」に参画するにあたり、屋台を引いて町に出た守本医師のように、最初は私も素性を明かさず雑談の輪に入ろうと考えていた。しかし、スタッフや来訪学生のなかには学生相談室の利用者（2023年度の利用者実数は在籍学生の5%を超える）が当然ながら含まれることが見えてきた。また、そういった多重関係の懸念がない場合でも、雑談の途中で相手がカウンセラーだとわかると、自分の内面を読



図2



図3

み取られるのではないかと身構える学生がいそうな感触を抱いた。そこで主に後方支援に回ったために、どんな学生がどんなニーズをもって参加し、どんなつながりの処方がなされたのかを直接知ることがあまりできなかった。

心残りになりそうであったその点については、3名のチームメンバーの先生方にインタビューしていろいろと伺うことができたので、その要点をここに書いておきたい。

それぞれの先生には印象に残る来訪学生があったようだ。「わーっと喋り始めて、見た目ではわからないと思った」との感想が添えられたのは、留学のための休学から復帰してきた学生である。学年がズれて、授業で知り合いがいなくなってしまったという。他にも、一人暮らしで友だち作りが得意でない様子の学生、事情があり一度辞めてから復籍してきた学生など、キャンパス内で居場所を見つけるのが難しい学生というところが共通していた。さらに、複数回の来訪者には社会科学系の学部の学生が多かった。共通するのは、ゼミや卒論が必修ではないことで、自力で友人や仲間を見つけられないと孤立しやすい環境であることが窺える。

具体的な「つながり」の処方については、就活の不安を語る学生にキャリアセンターを、学生生活の情報を求める学生に学生生活支援センターを紹介した程度で、保健室や学生相談室につなぐ必要を感じた学生はいなかったとのことであった。これは、別稿（高石, 2025）でも触れたが、開放的な空間での5分間の雑談というしつらえと、当日にならないと時間と場所が告知されないという偶然性を重視したしかけが、自己開示をしそうない効果をもたらしていたと考えてみることが可能である。専門的な部署につながらなかることは、処方が十分に行えなかつたという意味ではない。本報告書の序文にも書かれているように、こ

の取り組みの最大の効果は、キャンパス内で、学部、学年、立場を越えて、様々な教職員と学生とが新たなつながりを創生できたところにあると言えるだろう。

最後に、反省点として一部の先生から語られたのは、スタッフとして参加した学生をどう育てるかという側面である。自ら希望したなかには、内気で、自らもつながりを求めるタイプの学生が少なくなかった。次第に慣れる学生もいるが、コーヒーを出す準備に終始してしまいがちな光景も見られたようである。社会的処方は、一方的なサービスではなく「共に創り出す」ところに意義があるとすると、スタッフ側の学生につながり方のヒントを提供するのは、ひょっとすると後方支援として学生相談が貢献できることかもしれない。

[文献]

- ・高石恭子 2024
社会的処方の観点から見た学生相談の可能性
甲南大学学生相談室紀要第31号 52–65
- ・高石恭子 2025
キャンパスにおける社会的処方の実践に心理臨床の専門家が加わることの意義
甲南大学学生相談室紀要第32号 56–68

高石恭子 (たかいし・きょうこ)

文学部／学生相談室、臨床心理学



神戸市生まれ。京都府下の母子療育教室、精神科病院の心理士などを経て1989年より甲南大学で学生相談に従事。臨床心理士、公認心理師、京都大学博士（教育学）、甲南大学文学部教授。夢や描画を用いた心理療法、子育て支援に関する研究も行ってきた。著書に、『自我体験とは何か—私が〈私〉に出会うということ』（創元社、2020年）、『子育ての常識から自由になるレッスン』（世界思想社、2021年）、共編著に、『学生相談と発達障害』（学苑社、2012年）、『学生相談ハンドブック【新訂版】』（学苑社、2020年）など。

アートからみた「雑談・屋台カフェ」

◎服部正

大学のキャンパス内で屋台カフェをやりたい。そう思い始めたのは2020年のことだ。当時、私は国際日本文化研究センターの「縮小社会の文化創造」という共同研究に関わっていた。その研究会の中で「社会的処方」という考え方を学び、孫大輔氏や守本陽一氏の屋台カフェによる健康相談の実践を知った。豊岡市のだいかい文庫に守本氏を訪ねたのは2021年3月だった。そこで実際に屋台を見た時に、これをキャンパスに持ち出すと何か面白いことが起るのではないかと直感した。まだその理由は明確ではなかったが、孤立した高齢者だけでなく、若い学生に対してもこの屋台は有効だと感じた。

しかし、世界はコロナ禍の只中にあった。コーヒーを飲みながら雑談をするなど、とても許される状況ではなかった。そんな私の背中を押してくれたのは学生たちだった。コロナ禍の自粛ムードが幾分緩んできた時期に、控えていたゼミの飲み会を数年ぶりで復活させることにした。まだ対面での食事会に不安を感じる学生も多いだろうし、そもそも学生がそのような機会を求めているのかどうかも定かではなかった。だが、予想に反してゼミの学生ほぼ全員が参加してくれた。教室では毎週のように接してきたが、これほど生き生きと楽しげに談笑する姿を見たのは初めてだった。一人の学生から、先生と授業以外の雑談をしたのはこれが初めてかもしれないと言われたことは、大きな後悔となって私の心に残った。

学生同士の、そして学生と教職員との雑談の場が大学には必要だ。コロナ禍で失われた雑談の場を大学に取り戻すことは、大学の健康のために必要なことだ。そう確信した。しかし、私は美術史・芸術学を専門とする教員であり、学生の心の健康についても、所属や地位を離れて人が集うサードプレイスについても、専門的な知識は持ち合っていない。この「雑談・屋台カフェ」という実践活動に論理的な基盤を与えるた

めには、専門家の協力が不可欠だった。こうして、4人のメンバーによる研究プロジェクトが発足した。参加してくれた先生方には、改めて謝意を表したい。

公共の場に屋台を出すことが健康に寄与することは、すでに医療面からは様々な実践的検証が行われていた。しかしそれだけであれば、門外漢の私の心にそれほど響くことはなかっただろう。私が直感的にこの活動に意義を感じることができたのは、社会的処方に関わる医療や福祉の活動が、アートの実践とあまりにもよく似ていたからだ。

「ソーシャリー・エンゲイジド・アート (Socially Engaged Art)」(以下、慣例に倣ってSEAと表記する)と呼ばれる芸術動向がある。社会の諸問題や様々な社会集団と積極的に関わることそれ自体を芸術表現へと転化していく傾向のことだ。フェミニズムなどの社会問題を扱う芸術は1960年代から存在したが、SEAはアーティストが一方的に発信するものではなく、観衆の参加や観衆との協働を積極的に推し進めるものとして、1990年代以降に広がりを見せた。ここでその詳細を論じる紙幅はないが、SEAにはいくつかのパターンがあり、そのうちの一つに共食の場を作るというものがある。最も有名なのは、1990年にニューヨークのギャラリーでパッタイ(タイの焼きそば)を観客に振る舞つたりクリット・ティラヴァニのパフォーマンスだろう。そこでは、ニューヨークの現代アートのギャラリーという富裕層が集う場において、非西洋圏であるタイの郷土料理で人と人の関係性を再構築したことに批評的な意味を見出すことができる。

しかし私が豊岡で屋台を見た時に最初に思い浮かべたのは、陶芸家きむらとしろうじんじん氏の野点プロジェクトだった。リヤカーに陶芸の窯と絵付けの材料、抹茶道具一式を積み込み、移動した先で参加者が絵付けを行い、その場できむら氏が焼成した器

でお茶を楽しむことができるというこの取り組みは、1995年に始まって今も各地で実演されている。きむら氏は、大阪西成のブレーカープロジェクトとも関係が深く、現地で野点を行うだけでなく小学校跡地で継続的な陶芸ワークショップも行っている。研究会にブレーカープロジェクトの雨森氏をお招きしたのも、きむら氏の活動が念頭にあったからだ。

そしてもう一人、私の頭に浮かんだのは公開研究会でお招きした山村幸則氏の活動だ。山村氏もまた、町に屋台を繰り出し、あるいは町や展示室で共食の場を作り出すことで、その場限りの関係性を構築していく。きむら氏や山村氏の作品には、周到に準備された屋台やリヤカーの設えや衣装、実行に至るまでの計画のプロセスなども含めて、芸術的な要素がふんだんに盛り込まれている。研究会で雨森氏は、その行為がアートとなるかどうかはそこに批評性があるかどうかだと指摘した。たしかに彼らの作品からは、陶芸や茶道、食肉行為や盆栽に対する既存の前提を根底から問い合わせ直す批評性を感じ取ることができる。

では、私たちの「雑談・屋台カフェ」はどうなのだろうか。これは果たしてアートなのだろうか。大学という組織の既存の枠組みに横やりを入れるという意味では批評性がないわけではないが、大学における教育活動の一環とみることもできる。ここで私は、公開研究会での山村氏の言葉を思い出す。自身の制作について山村氏は「どうなるかわからないことをやっていきたいということに尽きる」と要約した。私たちの「雑談・屋台カフェ」も、处方なのかアートなのかも分からぬまま続けてきたからこそ、そこに何やら豊かな場所と時間が生まれていたに違いない。2023年に孤独・孤立対策推進法が成立するなど、社会的処方は政策的にも注目を集め、「文化的处方」という新しい言葉も生まれている。そのような制度の枠組みに取り込まれて批評性を失わないためにも、「雑談・屋

台カフェ」は引き続きアートの実践から学び続けなければならない。

最後にもう一言。この活動が「雑談」に力点を置くあまり、寡黙であることに対して抑圧的にならないようにといふことも、常に意識してきたことだ。このプロジェクトの視察活動の中で、長年にわたって精神科病院で患者と踊るワークを続けている岩下徹氏や、ホームレスのダンス集団「新人Hソケリッサ」による、言葉を介さない即興ダンスのワークショップを体験したことは、「雑談・屋台カフェ」の仕組みを考えるうえで大きな示唆を与えてくれた。そこでは、ただ人と人が共にいるだけでも感應が起り、はっきりとは目に見えないながらも相互に影響を与え合っていることを実感した。言葉を発することなくその場に佇んでいる人、遠くから見守ってくれる人も含めて「雑談・屋台カフェ」がある。それだからこそ、この場所は多様で豊かなものになったのである。2年間、計16回の「雑談・屋台カフェ」に関わってくれた全ての人に感謝をこめて。

服部正（はっとり・ただし）

文学部人間科学科、美術史・芸術学



兵庫県生まれ。1995年より兵庫県立近代美術館、兵庫県立美術館、横尾忠則現代美術館の学芸員を経て、2013年より甲南大学文学部准教授、2019年より現職。アウトサイダー・アートやアール・プリュット、障害者の創作活動などについての研究や展覧会企画を行っている。著書に、『アウトサイダー・アート』（光文社新書、2003年）、『山下清と昭和の美術』（共著、名古屋大学出版会、2014年）、『障がいのある人の創作活動』（編著、あいり出版、2016年）、『アドルフ・ヴェルフリ 二萬五千頁の王国』（監修、国書刊行会 2017年）など。

参加者の声

「雑談・屋台カフェ」に参加してくださった方々にお話しをお聞きしました。カフェに参加した動機、そこで交わした会話のこと、カフェの魅力、もっと良くなるためのアイディアや、大学内での居心地の良い場所などについてお話しいただきました。インタビューは対面で行い、お聞きした内容を服部が要約してまとめました。

文学部4年生 Aさん

この活動のことはゼミでの案内で知りました。色々な方が話をしに来てくれるのが面白くて、純粋に楽しいと思いながらほとんどすべての回に参加しています。「雑談」という軽いテーマなので、スタッフとしても気楽に参加しやすいですし、来てくれる方々にも楽しんでいただけているのが良く分かるのでいいと思います。常連で来てくださっている方々とは顔なじみになっているのでよくお話をします。印象に残っているのは、ポートアイランドキャンパスに出張に行ったことで、近くの企業の社員の方が来てくださって、色々とお話を聞くことができました。なぜその企業に入ることになったのかなど、就職活動の参考にもなりました。あとは、参加者として来た先生がコーヒー豆を挽くのを手伝ってくれたりしたこと印象に残っています。

夏場は暑いので、アイスコーヒーが提供できればいいなと思います。そのためにはクーラーボックスや氷が必要で、結構大変だと思いますが。大学でお気に入りの場所は図書館とiCommonsです。授業と授業の合間などは、共用スペースで友達と話をしながら過ごしていることが多いですね。

文学部3年生 Bさん、Cさん、Dさん

(3人の意見を総合的に要約)

普段関わることのない他学部の学生や教職員の方々などと話すことができて、新しい視点が得られるところが面白いです。会話から一人ひとりの生活というか、人生を知ることができるのも良いところだと思います。この活動の良いところは、無料で飲み物を提供できていることだと思います。だからこそ、不定期で、場所も変わっているけど、いつも人が集まっていると思います。色々な学部、ゼミの学生がスタッフとして参加できるのも良いですね。人と人のつながりの重要性を実感できることも良いところだと思っています。

会話は参加してくれた他学部・他学科の学生として

いることが多いですが、職員さんとも話すようにしています。印象に残っている会話は、同じ学部の先輩が自分から率先して留学生との交流の機会を作っているという話を聞いて刺激を受けたことですね。ポートアイランドキャンパスに出張した時のことも印象に残っています。近隣の企業の方が社会人になってからアメリカに留学した話をしてくださいって、その際に居場所作りのような活動をしたと教えてくださいました。会話以外だと、来てくれた人同士で新たな交流が生まれていることが印象的です。初対面の人同士でもコーヒーを飲んで会話しているうちに笑顔が増えて、話が盛り上がっていく様子が興味深いです。

この活動に参加しているのは、自分の知らなかった人生経験や新たな視点を得られるからです。不特定多数の方々と関わることが色々な考え方や人生を知るきっかけになり、そこに学びがありますね。さらに活動を改善していくには、インスタグラムをもっと活用して広報活動をしたり、お菓子を用意したりするのがいいんじゃないかな。アンケートを活用して参加者の意見を参考にするのも大事ですね。

大学内でのお気に入りの場所は図書館前のテラス。5号館3階のサイバーライブラリがお気に入りです。空き時間もサイバーライブラリでPCを見て過ごしたりしています。あとはパソコン教室で作業をしていることが多いかな。作業をする時は図書館ということもあります。あとは友達と学食で過ごしていることが多いです。

財務部 Eさん、Fさん

カフェ活動はインスタグラムをフォローしているのでその日の朝に開催場所を知っています。同僚にもその情報をお知らせしたりしています。普段の仕事では学生さんと会う機会はあまり多くないので、学生さんが活動している様子が見られるのが嬉しいですね。もちろんコーヒーも美味しいのでそれ目当てでもあります。



雑談・屋台カフェは、何よりも学生さんと会える場所と思っています。わりとよく参加していますが、最初の頃はコーヒーを淹れるのも、会話するのもぎこちない感じだったけど、最近は手際も良くなって、よくおしゃべりもできるようになってきたように思います。

学生さんと話している時間と、同僚と話している時間は半々くらいでしょうか。せっかくなので、なるべく学生さんに話しかけるようにしています。学生さんが普段どんなことに取り組んでいるのかとかも聞きますし、学生の視線での大学のことを知る機会にもなっています。あと、自分たちの仕事に関して言えば、予算申請の書類で見ていたコーヒー豆や紙コップなどがこうやって使われて、学内の活動に活かされているというのを知れるのも面白いですね。

学生との会話で印象に残っているのは、この活動を通じてコーヒーに興味を持ったという学生がいたことです。あとは最初の頃より学生さんの笑顔が増えていて、学生たちの成長が実感できたことが印象に残っています。繰り返し参加していると、そこで久しぶりに会う同僚もいて、お互いにカフェのリピーターになると毎回会うようになったりしました。

改善点としては、通り過ぎてしまう人が多いのが残念だなと思うことですね。興味はありそうな様子なんだけど、自分から声をかける勇気が出なくて通り過ぎてしまうという人をわりとよく見かけるので、もっと歩いている人に積極的に声をかけても良いんじゃないかなと思います。

休憩時間は学食でお昼を食べて、コーヒーを飲んでいるうちに終わることが多いですね。たまに図書館に立ち寄ることもあります。あと、iCommonsで卓球ができる日があって、ほんの10分くらいですけど参加することもあります。そこでも学生さんと一緒にすごせるので楽しいです。そんな感じで、学生さんの活動がもっといろいろ見えるかたちになればいいのだと思います。私たち職員も学生さんと会える場、学生さんの素の姿が見られる場所があるといいですね。

総務部 Gさん

カフェの活動は学内のオンライン掲示板で知りました。カフェの開催場所は同僚から教えてもらいました。ちょうどお昼に出ようと思ったタイミングで、同僚に誘ってもらって参加しました。学生さんがすごく真面目に取り組んでいて、丁寧に豆からコーヒーを淹れてくれることに感心しました。普段の仕事では学生さんと接することはほとんどありません。キャンパス内や学食などで見かける学生さんの様子とはちょっと違って、真剣に物事に取り組んでいる感じが新鮮でした。

一緒に行った同僚と雑談をしている時間も長かったのですが、学生さんともおしゃべりをしました。同僚との会話では、その人が学生時代に同じように自分で豆からコーヒーを淹れて飲んでいたと聞いて驚いたのが印象に残っています。学生さんは、コーヒーについてお話をしたり、あとは自分の学生時代の経験とかをお話したりしました。



どうしても同僚と一緒に行くとその人と話す時間が長くなってしまいますが、もっと学生さんともおしゃべりしたいので、学生さんから積極的に話しかけてもらえると嬉しいですね。今日のテーマ、お題のようなものを決めておくとかすると、話のきっかけができるかもしれません。同じ課の同僚は、コーヒーと一緒にショコレートとかあるといいのにと言っていました。

休憩時間は、お昼ご飯を食べて、事務室に戻ってお茶を入れたりしているうちに終わってしまいますね。お昼は一人で学食で食べていることが多いです。学生さんの様子とかも見られて面白いので、一人で行くお昼の学食が私にとっての居心地の良い場所ですね。あとは、学内に一人になれるような場所がもっとあると、学生さんにとっても良いのだろうなと思います。

文学部事務室 Hさん

カフェの活動場所は、インスタグラムで確認しています。学生さんの様子を見に行く感じで参加しています。文学部の先生方が中心に行われている活動ですが、そこに他学部の学生たちも参加しているのがいいですね。文学部の学生と他学部の学生の新たな交流が始まっている様子などを見ると嬉しいです。

学生さんともお話をしましたが、顔なじみの職員と久しぶりに会っておしゃべりしたりもしました。部署が違うと、顔は見かけて挨拶くらいはしても、おしゃべりをする機会はありませんからね。学生さんとのお話しでは、就職活動を始めたばかりの学生さんと、私自身の大学での仕事のこととか、大学で働き始める前に勤めていた会社のことなどをお話しして、熱心に聞いてくれたことも印象に残っています。

雑談カフェはコーヒーも美味しいし、それを学生さんが作ってくれているのも嬉しいですね。学生同士が仲が良さそうな感じがいいと思います。学科の違う学生さんたちが一つのことを協力してみんなでやって、交流が生まれているのが良いですね。その裏返しという面もあるのですが、みんなでワイワイ楽しそうにやっていると、一人の子が参加するのに少し勇気がいるのかなと思います。ワイワイしているのも良いことだけど、一人の人が参加しやすい居場所にもなれると、さらに良いと思います。

お昼休みは、学食で食べたり、カフェパンセで買ったものを事務室に持つて帰つて休憩スペースで食べたりしています。同僚と一緒に過ごすこともあります。忙しい時期は早めに食事を切り上げて仕事に戻ってしまうこともありますが、余裕がある時は図書館に行って小説や雑誌を眺めたりするのが好きですね。留学生にはグローバルゾーンがあって、学生同士が楽しく過ごせるような場がありますが、似たような場所が他の一般の学生さんたちにあればいいのに思いますね。色々な学部の学生が一緒に交流できる場所は大切だと思います。職員も、別の部署の人と一緒にランチに行ったりとか、もっと交流できる時間と場所があれば良いと思います。

文学部教員 Iさん

この活動のことは、最初は同僚の教員から教えてもらいました。その後はインスタグラムをフォローして、できるかぎり顔を出すようにしています。この企画のコンセプトに関心があるからです。制度の隙間にノマド的に現れる場所を作つて、そこで普段は出会わな

い人同士が出会うということ自体もそうですし、そのような場所のその時その時の様子の違いにも興味があって、それを見ようと思って行っています。日本の社会は、組織や立場を通じてしか人同士が出会いにくい社会で、意識しないと違う立場の人と出会えないという面が強いのですが、そういう組織や立場を超えて色々な人が出会えるのがこの「雑談・屋台カフェ」の魅力だと思います。

若い世代の話を聞きたいので、カフェにいる時はなるべく学生さんと話をするようにしています。教室の外のほうが自分のことを話してくれるんです。印象に残っているのは、法学部の学生さんが演劇をやっていて脚本も書いているので、文学部の授業に興味があると言ってくれたことですね。逆に私から、法学の知識を活かした脚本を書けるかもよって伝えたら、そんなこともあるのかって驚いていました。カフェのことではないですが、隣でモルックができるようになっていた時があって、そこで教員が遊んでいたのが平和でいいなと思ったのでよく覚えています。バラバラなことをしながらひとつの場所にいるというのは、中心がない感じでとても素敵です。この活動は、サイズ感も、気負ってない感じも、ちょうど良い感じなので、今まで無理をしないで続けて欲しいと思います。継続することが何より大事なので。

私個人の居心地の良い場所は、絵が飾ってあるときのギャルリー・パンセですね。あとは自分の研究室があるので、それを自分だけでなく来てくれた人にとっても居心地の良い場所にしたいですね。学生が来やすい場所でありたいと思います。あとは、図書館の地下の映画館がとても良い場所なので、ぜひともっと活用してほしいです。

この大学は余白が少なくて、あまり人が集まるようになっていない感じがします。ベンチが少なく語らいの場がないのが残念です。出身大学には聖堂があって、暗い中で静かに黙想することができ良かつたのですが、この大学にはそういう場所もあまりないです。宗教系の大学ではないので聖堂や礼拝堂はないのですが、それでも、一人で静かに考え事ができる場所は大切だと思います。

学外からの参加者 Jさん（三木市在住）

山村幸則さんの公開研究会に参加して、この活動のことを知りました。山村さんとは昔からの知り合い

で、色々な場所で展覧会を見せてもらっていたので、公開研究会のこともご本人から教えていただきました。研究会の時に雑談カフェを体験して、これが今後どうなっていくのか、学生さんがどのように変わっていくのかということに興味が湧いて、その後もなるべく参加するようにしています。来られない時も、インスタグラムで開催している様子を見て安心していることもあります。

何でもデジタルで遠隔で連絡ができる時代は便利だけど、対面でのコミュニケーションを訓練する機会が少なくなっているように思います。そんななかで、この活動は若い人が対面でのコミュニケーションが苦手なままになってしまわないための良い訓練の場だと思います。最初の頃に比べると、学生さんのコミュニケーション力もずいぶん向上していると思います。それだけじゃなく、この「雑談・屋台カフェ」自体も最初よりも堂々とやっているように見えて、学生の認知度も学内でのプレゼンスも上がっているようにみえます。屋台カフェ自体の居場所が大学内にできてきた感じですね。

おしゃべりは、なるべく学生さんとするようにしています。会話が苦手そうな人にも、こちらから積極的に話しかけています。会話を通じて、学生たちが思った以上にしっかりと社会のことを考えていることを知りました。日常的な社会の中での問題とか、さらっと話したりすることに驚かされます。

このカフェの目的として、困りごとを抱えている学生さんを相談できる場所につなぐという面もあるとお聞きしていますが、そのことはあまり前面に出さない方が良いのかなと思います。相談できる場所というように目的化してしまうと、かえって必要としている人を遠ざけてしまうこともあるのかなと思います。できるだけ門戸を広げて、ワイワイし過ぎずに、程よい感じで色々な個性の人を受け入れてほしいです。

私自身にとってのお気に入りの場所は、山村さんが個展をしておられた高砂のカフェギャラリーとか、地元を含めて色々な場所に好きなカフェがあります。一人になれる時間はとても大切です。この「雑談・屋台カフェ」のように知らない人と出会えて賑やかにおしゃべりできる場所と、自然に居られるような静かな場所の両方があることが望ましいと思いますので、ぜひこの活動は継続してほしいです。

主要参考文献リスト (著者名50音順)

- アート&ソサイエティ研究センター SEA研究会『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践 芸術の社会的転回をめぐって』
フィルムアート社、2018年
- アートミーツケア学会編『生と死をつなぐケアとアート』
アートミーツケア学会、2015年
- 青木真兵、青木海青子『彼岸の図書館：ぼくたちの「移住」のかたち』
夕書房、2019年
- 青木真兵『手づくりのアジール「土着の知」が生まれるところ』
晶文社、2021年
- 秋山正子編『「暮らしの保健室」ガイドブック「相談／学び／安心／交流／連携／育成」の場』
日本看護協会出版会、2021年
- 阿比留久美『孤独と居場所の社会学』
大和書房、2022年
- 阿部真大『居場所の社会学：生きづらさを超えて』
日本経済新聞出版、2011年
- 石山恒貴編著『地域とゆるくつながろう—サードプレイスと関係人口の時代』
静岡新聞社、2019年
- 稲庭彩和子、伊藤達矢『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』
青幻舎、2018年
- 居場所カフェ立ち上げプロジェクト編著『学校に居場所カフェをつくろう！——生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』
明石書店、2019年
- パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門：アートが社会と深く関わるために10のポイント』
フィルムアート社、2015年
- レイ・オルデンバーグ『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』
みすず書房、2013年
- 岡檀『生き心地の良い町 この自殺率の低さには理由(わけ)がある』
講談社、2013年
- 加藤優一『銭湯から広げるまちづくり：小杉湯に学ぶ、場と人のつなぎ方』
学芸出版、2023年
- 九州大学ソーシャルアートラボ編『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』
水曜社、2018年
- 九州大学ソーシャルアートラボ編『アートマネジメントと社会包摂 アートの現場を社会にひらく』
水曜社、2021年
- エリック・クリネンバーグ『集まる場所が必要だ—孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』
英治出版、2021年
- 顧彬彬、宮崎晃吉『最小文化複合施設』
真鶴出版、2024年
- 古賀弥生『芸術文化と地域づくり——アートで人とまちをしあわせに』
九州大学出版会、2020年
- 近藤克則『健康格差社会第2版：何が心と健康を蝕むのか』
医学書院、2022年
- 近藤克則『長生きできる町』
角川新書、2018年
- 斎藤保『コミュニティカフェ：まちの居場所のつくり方、続け方』
学芸出版、2020年
- 新野保路、中谷翔『家庭医とゲストハウスオーナーが診るウェルビーイングな暮らし』
NextPublishing Authors Press、2023年
- 孫大輔『臨床と宗教 死に臨む患者へのスピリチュアルケア』
南山堂、2023年
- 孫大輔『対話する医療 一人間全体を診て癒すために』
さくら舎、2018年

- ・多賀幹子『孤独は社会問題：孤独対策先進国イギリスの取り組み』
光文社新書、2021年
- ・武田裕子『格差時代の医療と社会的処方：病院の入り口に立てない人々を支えるSDH（健康の社会的決定要因）の視点』
日本看護協会出版会、2021年
- ・田中康裕『わたしの居場所、このまちの。制度の外側と内側からみる第三の場所』
水曜社、2021年
- ・東京藝術大学 Diversity on the Arts プロジェクト編『ケアとアートの教室』
左右社、2022年
- ・南雲明彦編著『庭に小さなカフェをつくったら、みんなの居場所になった。～つなげる×つながる ごちゃまぜカフェ』
ぶどう社、2019年
- ・西智弘他『ケアとまちづくり、ときどきアート』
中外医学社、2020年
- ・西智弘他『社会的処方：孤立という病を地域のつながりで治す方法』
学芸出版、2020年
- ・西智弘編著『みんなの社会的処方：人のつながりで元気になる地域をつくる』
学芸出版、2024年
- ・西上ありさ『ケアするためのプロジェクトデザイン：地域で「何かしたい！」と思ったら読む本』
医学書院、2021年
- ・帚木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ：答えの出ない事態に耐える力』
アスコム、2017年
- ・濱野将行他『居場所づくりから始める、ごちゃまぜで社会課題を解決するための不完全な挑戦の事例集』
クリエイツかもがわ、2024年
- ・クレア・ビショップ『人工地獄 現代アートと観客の政治学』
フィルムアート社、2016年
- ・藤浩志他『地域を変えるソフトパワー：アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験』
青幻舎、2012年
- ・ニコラ・ブリオ『関係性の美学』
水声社、2023年
- ・ヴィヴェック・H・マーシー『孤独の本質 つながりの力』
英治出版、2023年
- ・前野隆司『幸せな孤独 「幸福学博士」が教える「孤独」を幸せに変える方法』
幻冬舎、2021年
- ・ダニエル・ミラー『消費は何を変えるのか：環境主義と政治主義を越えて』
法政大学出版局、2022年
- ・宮崎晃吉編著『最小文化複合施設』
真鶴出版、2024年
- ・村上慧『家をせおって歩いた』
夕書房、2017年
- ・森川すいめい『その島のひとたちは、ひとの話をきかない』
青土社、2016年
- ・柳下換、高橋寛人編著『居場所づくりにいま必要なこと——子ども・若者の生きづらさに寄りそう』
明石書店、2019年
- ・山崎亮『コミュニティデザイン——人がつながるしくみをつくる』
学芸出版、2011年
- ・山崎亮『ケアするまちのデザイン：対話で探る超長寿時代のまちづくり』
医学書院、2019年
- ・山田撫治編著『縮小社会の文化創造』
思文閣、2023年
- ・山納洋『つながるカフェ：コミュニティの〈場〉をつくる方法』
学芸出版、2016年

このプロジェクトは、甲南大学総合研究所の研究奨励助成を受けて実現したものです。
このプロジェクトの実現にあたり、研究会の講師を務めていただいた皆様、視察を受け
入れてくださった皆様、スタッフとして「雑談・屋台カフェ」の運営を支えてくださった学生
の皆様、快くインタビューに応じてくださった皆様、甲南大学フロンティア研究推進機構
のスタッフの皆様をはじめ、さまざまなご尽力を賜りました関係機関や個人の方々に厚く
御礼申し上げます。

甲南大学総合研究所「社会的处方研究プロジェクト」報告書 2023-2024

キャンパスで雑談・屋台カフェをやってみた

初版発行 2025年3月10日

編集：服部正（甲南大学文学部）

鈴木大義

執筆：服部正

阿部真大（甲南大学文学部）

大澤香織（甲南大学文学部）

高石恭子（甲南大学文学部／学生相談室）

デザイン：鈴木大義

写真：川本まい（表紙、p.6-11、13 *印、p.14-15、p.49-50）©Mai Kawamoto

発行：甲南大学総合研究所

©Konan University

無断転載複写禁止 All rights reserved

注記：本報告書で〈甲南大学総合研究所「社会的处方研究プロジェクト」〉と呼んでいる
助成金の枠組みの申請時の正式名称は「社会的处方の手法による学生支援の実践的
研究」である。しかし、「学生支援」が前景化することは逆に支援が必要な学生を遠ざけ
てしまう可能性があるため、活動の中では主に通称の「社会的处方研究プロジェクト」を
用いている。



甲南大学「雑談・屋台カフェ」

@zatsudan.cafe_konan

甲南大学総合研究所

